
続・八号の異世界

田端

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

続・八号の異世界

【Nコード】

N5186H

【作者名】

田端

【あらすじ】

貴族になりハルケギニアで暮らす事にした中川浩二陸軍伍長はまずアルビオン戦役に勝たなければゆつくり暮らせないと考えていた。そこに二機の飛行機が…これは帰還を諦め小国トリステインを支援し戦争を勝利に導くべく戦いに身を投げた日本兵やその他地球人の物語である。

1 ラバウルの魔王と米海軍（前書き）

この小説は山口多聞先生の『ゼロ戦才人』に影響され書き始めたものです

続編は義勇軍やら兵器集めやらちよつとネタが被る

点がありますができるだけオリジナリティーを出してみます。

あと、『都合主義』にご注意ください

1 ラバウルの魔王と米海軍

タルブ降下戦からはや三週間、
生き残った中川陸軍伍長と田口陸軍上等兵は学院で安定した生活を
送っていた

本日中川は九五式軽戦車の点検をしていた

「固定化の魔法かかっているのになんで点検するの？」

ルイズが訊いてきた

「固定化の魔法はかかっているけど、故障はすると思う
念の為に点検するんだ」

固定化の魔法がかかっているけど

もしかしたら故障するかもしれないと思い中川は点検を行った
中川は歩兵だがずっと八号とともにしていたら随分と戦車に詳しく
なった

弾はあふれるほどある、コルベール先生が毎日複製するくらだ
魔法で弾薬庫を造ってもらったけど毎日毎日弾を造ってたら
そろそろ限界がきた

いや、「もう」といっべきだろう

そういえば今日は虚無の曜日だ
だからなんだという話だが

「異常なしっ」と

「やっぱり故障なんてしてないじゃん」

「まあいいじゃないか」

「やあ、中川さん」

また「やあ」か

まあどうでもよいのだが、いつも笑顔なコルベール先生がやってきた

「これ、今日の分ね」

大量の弾薬をおいていった

「こんなに複製しなくても…一台じゃ使い切れませんよ…」

「おや、これはすみません、つい張り切っちゃって…」

地球の技術を与えたら核爆弾以上なコルベールである

中川は核爆弾など知らんが

…むしろそれが恐ろしいかもしれない

核を知らずしてここハルケギニアで機械化軍隊でも造ってしまえば
いずれは核にたどり着く、1940年代の技術で可能な爆弾である
からすぐだろう

しかし使えばどうなるかなど知るはずもない

…現状では核爆弾が出来る要素はないが

「ん？」

「日食かしら？」

あたりが急に暗くなってどつやどつや日食らしい

「こりゃあ、皆既日食ですな」

「そつみたいですね」

その時、レシプロ機独特の音が聞こえた

「ん？」

「どうされました？」

「なにか、聞き覚えのあるような音が」

「竜の羽衣みたいな音ね、でもちよつと違う感じ」

「竜の羽衣みたいなのがまだあるのかしら？」

ルイズにもなんとなくわかった

竜の羽衣と似たようなものが近くにいと

中川は上空をずっと見ているとなにかが目に映った

「…飛行機や！！二機！一機は戦闘機！もう一機は…大きさからして爆撃機か輸送機だ！」

「？」

ルイズにわかるわけない

飛行機が二機飛んできたのは確認できた
数十分後、2機は強行着陸してきた

その姿に中川は目を疑った

一機はかつてあの島で毎日のように護衛機としてやってきたアメリカ海軍のF6Fヘルキャットだ
そしてもう一機は海軍の零式輸送機である

さつきまでこの二機は戦っていたのだろうか？
零式輸送機には被弾の跡がある

「なによ、これ、竜の羽衣と全然違うじゃないの」

その時、ヘルキャットから何者かが降りてきた

アメリカ軍ということもあって中川は警戒する
しかしアメリカ軍ということは敵である
その敵が輸送機なら簡単に落とせるはず
なぜ撃墜しなかったのだろうか？
なぜ並んで着陸したのだろうか？

「何者だ…といってもアメリカ海軍なのはわかった、名前は？」

警戒しつつ中川は名前を聞く

「カーチス・イーガー、海軍少尉だ」

名前からしてアメリカ人だ

見た目や乗ってきた飛行機からも国籍は判別できるが

「今なにしてた？」

「その輸送機を隊長と共に撃墜しようとしていた」

「隊長は？」

「ここにはいない」

そして、輸送機からも日本兵が降りてきた
貨物型であるため乗員は11人だ

「ちっ 危ないところだった」

「戦闘機に乗っていれば俺は無敵なのに…」

そういつて降りてきた熱い男、戦闘機乗りらしい

「あれ？なんでここに陸軍の軍人が？」

「貴方は誰ですか？」

「紹介が遅れました、私は西澤広義、海軍飛曹長です」

西澤広義海軍飛曹長、120機を撃墜した日本のエースパイロットだ
零式輸送機に乗っている時にハロルド・P・ニュウエル中尉搭乗の
グラマンF6Fに攻撃され、

輸送機もろとも撃墜され、戦死したはずだ

ところが『なにか』の間違いで日食にはいつてしまい輸送機と今攻撃していたハロルド中尉の

部下、カーチス・イエーガーはハルケギニアにきてしまった

ちなみにカーチス・イエーガーはもちろん架空の人物だ

ほかにも日本兵10名がいた

その中には西澤のように戦闘機乗りが多かった

格納庫

中川とルイズ、そしてコルベールが西澤とイエーガーの話聞いてあげた

「…というわけで私は撃墜をやめた」

「非常時には敵味方関係なしってやつですかい、いやあ命拾いしましたわあ」

「でも戦闘機がないんじゃあ俺死んでしまつかもなあ」

西澤は本当に飛行機が好きらしい

「戦闘機なら一機だけありますが？」

「本当ですか!？」

亡き霧島少尉が残した零戦が格納庫にしまつてある

「おお!これなら俺は最強だ!」

西澤は相当腕に自信があるらしい
それはそうだろう、彼は120機を撃墜した撃墜王なのだ

「ありがとな！」

「浩二…：な…：なんなのあいつ？」

「さあ、飛行機好きなんだろ」

ルイズは零戦があったことにおおはしゃぎしている西澤を見て呆れてた

今度は西澤がこっちに近づいてきた

「なあ、中川さんよ、あれくれないですか？」

「えっ？」

西澤は零戦をくれという

しかし霧島少尉の遺品である零戦は将来なんかの役に立つかもしれない

そう簡単に譲るわけには…

（ん？待てよ？）

（こいつの話では、こいつは120機を撃墜した撃墜王なんだよな？）

（…：ということはいつに飛行機を操縦させれば現状で最強なのは？）

そんな考えが頭を過ぎる

「いいですよ、ただし条件があります」

その条件とは？

1 ラバウルの魔王と米海軍（後書き）

今回から登場兵器が増えます、ただし増やしすぎると強くなりすぎるのでほどほどにしたいと思います

現状で予定している主な登場兵器は零式輸送機、隼、ヘルキャット、チハ、戦艦大和です。

そのほか是非とも出してほしいというリクエストがありましたら評価欄などでお知らせください。

2 大日本義勇軍計画

中川はあることを思いついた

これはちょうど一週間前から考え始めていたことだが

この世界で生き残るにはアルビオンとの戦争に勝つ必要がある
しかし今の惨状からトリステイン軍のみでの作戦行動は
危険すぎる、敗北に等しい

かといって戦力が復活してからではアルビオン軍の戦力も復活して
いる

いや…むしろアルビオン軍はすでに以前の損害から3分の1回復し
ているという

艦艇ではなく陸軍兵力だ、艦艇の製造には時間がかかる

…結局は総力戦、国力からトリステインの敗北は明らかだ

それだったらせっかく八号と零戦があるんだからこれを利用して
トリステインを助けようではないか

しかし零戦パイロットがいない

霧島が特攻してしまったからだ

…ならば撃墜王の西澤をパイロットにすれば万事解決ではないか
しかもうまくいけば輸送機とヘルキャットも手に入る

さらにこんだけ頻繁に地球からなにかが来るって事は、ハルケギニ
アには

まだまだ、地球人がいるということになる

そいつらを集めてトリステインの為に戦う軍隊を造れば

トリステインからみればでっかいアルビオンにも勝てるかもしれない

帝国陸軍では伍長と階級は下であるものの中川の思いつきは確かにトリストインを救済するにはいい作戦かもしれない

ただしこれにはいくつかの問題点がある

ひとつはそんなに簡単に地球人や兵器は見つかるのか？

もうひとつは土着化しててわからんかもしれない

さらにもうひとつはアメリカやイギリスなどの敵対勢力の場合、殺される可能性がある

そしてこれが最大、軍隊には工兵や衛生兵、整備兵などの様々な兵科が必要だが

これが全部必要な数、集まるかだ

幸い整備兵は平気に固定化の魔法をかければあとはちよつとした点検を

行うだけでよいので金はかからないだろうが

さらに軍を指揮できる人がいない

こうしたいいくつかの問題点はあるものの

中川は心の奥でこっそりと、義勇軍の設立を考えていた

「大日本義勇軍」という、祖国の名前をちよつととった義勇軍を設立しようと考えていた

「条件とは？」

「私は今、義勇軍をつくろうかと思っております」

「義勇軍！？」

ルイズも驚いた

まさか義勇軍なんて言葉がでてくるとは思わなかった

「義勇軍って…正規軍に所属しない自発的に戦闘に参加する軍隊の事？」

「ルイズ、わかってるじゃないか」

「いや…なんとなくたえただけけど…」

「…でも義勇軍なんて建てちゃってどうする気なのよ？」

「戦争に勝つ」

それまで中立的な立場であった中川からは
考えられない言葉だ

しかしトリスティンの人間であるコルベールからしてみれば
うれしいかぎりだ

「そのさいには、私は協力しますよ！
今こそ私の技術が試される時ですね！」

コルベール、頭に火がついたのか
やたら気合が入っていた

「それで、義勇軍が？」

西澤は訊く

義勇軍だけじゃなんなのかわからない

「ええ、貴方にはその義勇軍に入ってもらおうかと思えます」

「なぜですか？」

「今来た貴方はわからないでしょう、その他の兵士やイエーガーさんも是非

お聞きいただきたい」

本当は伍長だがドイツ軍将校の軍服と勲章のおかげでやたら偉そうに見える中川はその中身を説明した

「トリステインはアルビオンと戦争です、以前の戦いで降下部隊をなんとか撃滅しましたが

こちらの損害も大きく既に貴方達と同じようにこの世界にきた日本兵4人のうち2人が

命を落としました、二人とも戦死です」

「そのほか多くの兵士が亡くなり、この学院の生徒も数名亡くなりました」

「戦争はまだ続いているのですが戦力がかなり落ちてしまい今、戦力を整えて

いる状況ですが」

「アルビオン軍がすでに戦いに参加して損失した戦力の3分の1を回復しているのに対し

トリステイン軍はまったく手がついていません」

「このままでは戦争に負け、我々の身柄もただじゃ済まされないうしょう」

地球製兵器を持っている中川らに目をつけないわけがない
そのくらい中川は読んでいた

「そこで、正規軍の戦力を回復させるのではなく、我々が立ち上がって

戦うほうが手っ取り早いのではないかと思いました」

「この世界には現代装備を備えた軍隊がありません、しかし私の考える義勇軍はそこに

ある八号や零戦のような現代装備を備えた軍隊です」

もちろん八号や零戦は中川の観点からの現代装備であり今の兵器とし遠くかけ離れている、一昔前の代物だ

「ほう、その構想はいつから？」

「一週間前ほどでしょうか…」

「つまり、生き残る為には協力してくださいと？」

「そういうことです」

「…どうしますか？」

「うーん、しかしなあ…」

ハルケギニアにきたばかりでよくわからない日本兵11人、アメリカ兵1人は

戸惑った、義勇軍に入るべきか入らぬべきか

しかし行き先もなのまま食糧が尽きて死ぬのは嫌だし
変な国に身柄を拘束されるのも嫌だ
それに国への帰り方もわからない

西澤がまず名乗り出た

「よく、わかりませんが、戦闘機に乗って戦えるんですか？」

「ええ、おそらくですね」

「よし！俺は入る！輸送機で殺されるところだったけど死ぬときは戦闘機乗りとして

死にたいぜ！…というより零戦に乗ってるときの俺は最強だ！再び熱い空中戦を展開したいぜ！」

「俺たちも！西澤先輩についていきます！」

西澤と西澤の後輩らしい若いパイロット達は笑顔でついてゆくと答えた

さらにイエーガーも

「悪くはないな、あてもないし、よからう協力してやる」

「有事の時には日本もアメリカも関係ない」

全員が同意、翌日中川自らがアンリエッタの元へ

ここに正式に「大日本義勇軍」が誕生した

2 大日本義勇軍計画（後書き）

ご意見、ご感想、出してほしい兵器や

出してほしい人などがいましたらお気軽にどうぞ

ちなみに現在出演予定の实在の軍人は

山下奉文、坂井三郎、笹井醇一、加藤建夫、

ゲオルギー・ジューコフ、エルヴィン・ロンメル
などです

3 マレーの虎

翌日、設立を宣言した大日本義勇軍は基地を確保すべく、輸送機で視察へ行った

その結果、今度アルビオン大陸が最も近づくラ・ロシエールの付近に基地をつくることにした

トリストインは国力が年々弱まっていく

特にラ・ロシエールはきれいな街とは裏腹に失業者の数も多い

「つで、どうするの浩二？」

「なにを？」

「なにをって、どうやって基地を作るのよ？」

「失業者にやらせる」

「失業者!？」

「たしかにラ・ロシエールには失業者があふれ返ってるって姫様が言ってたけど…」

その他に学院の生徒達にも協力を要請した結果

50人ほどが集まった

平民の男が一気に貴族にのぼりつめたのが原因だろう

まあ中には無理やりつれてこられたのもいたが

「はあ…なんで僕まで」

「そんな事言ってるって別れちゃうよ？」

「ああ！そんなこと言わないでモンモランシー！」

「んもお、しょうがないわねえ、手伝ってあげますか」

「ひまつぶし」

本編の主要メンバーはほとんど集まった

さらに失業者1400人が集結、大規模な建設工事が開始された

「何日で完成しそうですか？」

「二ヶ月ほどで！」

「二ヶ月？長いわね」

「まあ、気長にまとう、アルビオン軍もそう早く攻めてくるわけではないし」

さらに、国の為に戦う義勇軍の基地が近くにできると
ラ・ロシエール市民の多くが建設工事を手伝ってくれた

トリスティンも工事に協力する為、工兵連隊を派遣した
そのほか、学院の教師たちも手伝い、二ヶ月と言われた工事は僅か
一週間で終わった

1200メートルの滑走路、近くの森林からとってきた木で造った簡素な司令部と格納庫などができた

この速度にはルイズ達も関心した

「は…早いわね…」

「予想以上に工事の進行が早かった…」

夜 -

会議が行われた

軍の総司令官を決める会議だ

「誰がふさわしいと思いますかね？」

しかしこの日の会議では決まらなかった

中川も候補にあげられるも本人が拒否した

これは自らが前線に立ち戦うためである

翌日 -

指揮系統がまだしつかりしていないのに最初の任務が課された

「なんでも近くの森で鉄の馬を連れ怪しい銃を持った集団がいるらしい、身柄を拘束してほしい」

との事だ

しかし指揮系統がまだしつかりしていない義勇軍は

ロクな行動がとれなかった

ひとまず中川が森へ単独潜入した

三八式歩兵銃と十四年式拳銃を持ち

カーキ色の上下を着ていた

しかし…

とんとん…

「!!!」

「なっ！なにもの!!!」

「私よ!」

「…なんだルイズか…」
ルイズがいた

「なにしにきたんだおまえ?」

「一応あなたは私の使い魔だし、ついてってあげないとね」

「は…はあ…」

そういえば契約上、まだ中川はルイズの使い魔である
とりあえず二人は行動を共にする

「ルイズ、これを貸してやる」

十四年式拳銃で

「えっ？　こんなの使い方わかんないわよ」

「いいから持つてる、なにかあったときそれで戦え」

中川はわかっていた

ルイズが虚無は使えてもほかの四系統の魔法は使えないと
なら武器を持たせたほうが安全だと思った

あれから一時間が経った

「よし、そろそろ飯にしよう」

飯は零式輸送機にあった米でつくったおにぎりだ

「なにこれ？」

「おにぎりって料理だ」

「そっ」

ルイズはおにぎりにかぶりついた

「質素だけどおいしいじゃないの」

おにぎりの味を認めた

さらに森の奥深くへ行った

「そんな奴ら存在するのが疑問ね」

「そろそろ引き返すか?」

「そうね」

時間的にもそろそろ引き返さないと
暗くなって出られなくなる

そして引き返し始めた

夕方にはもうすぐ森からでれる地点まで到着した

「後すこしだ」

「疲れたわ」

ドゥーン!

「なんだ?」

その時、近くになにか弾が、砂が舞う

「おえ!ゴホッ!ゴホッ!」

「な、なんなの!?」

その時、目の前には戦車が現れた

「戦車だと?」

「あれは九七式…」

九七式、すなわち九七式中戦車とは日本陸軍の主力戦車であった

通称『チ八』

中川にはわからなかったがあの中八は改良タイプ、一式47ミリ戦車砲を装備し、最大25ミリの装甲、最高速度38キロ、行動距離210キロ
4名の乗員が必要であった

元のスペックは九七式57ミリ18.5口径戦車砲を装備したものだ
また当時多くの戦車がガソリンエンジンが主流だった中ディーゼルエンジンを搭載
爆発的な火災発生の危険が少ない

いろいろと問題はあったもののなんとか八号よりもちょっとだけ遅い38キロに
とどめさせる事に成功、当時としては世界標準だったろう
しかしチ八の目的はあくまで歩兵支援、対戦車戦を想定していない為
後に格下であるはずの軽戦車にすら苦戦するという有様だった

主砲の57ミリ砲も貫通力がひくくこれは47ミリ砲に取り替えた
ことによって
多少改善されるもシャーマンを相手には歯が立たなかった
しかし一式や三式は本土決戦に備え内地に集中的に配備された事
四式と五式は試作車的な存在である為、数がなかったこと

そんな事からチ八は終戦まで主力戦車であり続け
8月18日より行われた占守島の戦いにも参加した

チ八が突然現れた

2両、3両、結果的に5両が現れた

さらに20名ほどの歩兵が中川とルイズを包囲する

「な…なによこれ…」

「あんまりいい状況ではない、だが交渉は成功するかもしれん」

「えっ？」

「あいつらは友軍の兵器を使用している、軍服までもが日本の軍隊だ」

歩兵はカーキ色の上下を着ていた

相手も中川の服装に気がついた

「ん？おまえはもしかして日本兵か？」

そう訊かれた

中川は正直に答えた

「そうです！日本陸軍伍長、中川浩二であります！」

「すまぬ、そっちの女に目がいつていた」

どうやらルイズを敵の国の人間と誤認したらしい

その時だった、驚くべき人物が現れた

「先ほどはすまなかった、私はこの者達の指揮官として謝罪致します」

がっちりした体格、どこかで見覚えのある顔
この男は間違いなく山下奉文大将だ

「ええ！？ 山下大将！？」

「知ってる人？」

「俺が初めて戦った戦場の指揮官だ、マレーの虎とうたわれている男だ」

「ふ〜ん」

ルイズはあんまり興味なさそうだ

しかし何故山下大将がここにいるのか

事情を聞けば彼は1945年から来たらしい

嵐に巻き込まれて戦車5両と歩兵と戦車の乗員合わせ40人の兵士と共に

この世界に来てしまった

昨日から森の中をさまよっていたらしい

夜 -

「ん？なんだねその格好は？」

夜、中川は例の独軍将校の格好で山下大将の前に現れた

「あ、はい！この世界での私のお気に入りというか…軍服以外の普通の服であります」

「私には軍服にしかみえないがな」

「ツハハハ」

「ところで、私に話とはなんですか」

「はい、実は…」

中川はすべてを話す

そしてこう頼んだ

「大日本義勇軍の総司令官になつてもらえませんか？」

マレーを短期間で制圧した名将、山下大将に

軍の総司令官になつてくれと頼んだ

「話を聞く限り、元の世界に返れる可能性は薄そうだ

しかも大日本帝国はまだあるのかどうかも不安だ」

「よかるう」

名将山下と40名の日本兵、チハ5両が義勇軍の戦力に加わった

しかし中川の構想する義勇軍とはまだ遠くかけ離れている

ゼロ戦 人や異 界 衛隊のように大軍を編成せねば

アルビオン軍とは戦えぬ、トリスティンを支援できぬ

3 マレーの虎（後書き）

ご意見、ご感想などがいましたらお気軽にどうぞ

4 軍神加藤

その頃、アンリエッタが女王に即位する

翌日、山下大将は自ら女王と面会しにいった

「まあ、貴方が大日本義勇軍総司令官の山下奉文陸軍大将ですね」

「そうです」

山下は城の場所など知らない
なので中川とルイズが案内した

優雅な馬車に乗せてもらい山下は満足げな顔だった
今でこそ一国の女王と話をしている為真剣な顔であるが

「正式に司令官が決まったことを報告しに参りました」

「そうですか、ルイズ、頼むね」

「え？」

「使い魔さんも義勇軍の兵士でしょ？ しっかり面倒みてあげなさい」

（女王様…そりゃちょっとひどいのでは？）

「そんな事言われなくてもちゃんと面倒みますよ」

ルイズは反論した
見てるのか？うそつけ

帰り道、山下が連れていた日本兵の一人に将校がいた
その将校は前から中川が狙っていた『九五式小型乗用車』を持って
いた

悪路にも強いこの車はルイズと山下大将を乗せて走るのにちょうど
よかった

エンジンを響かせくろがねは走る

「そういえば、中川伍長、貴方免許は？」

「一応とってます」

「それはよかった」

「免許？」

「我々の世界では運転するのに免許が必要なんだ」

「ふ〜ん、めんどくさいわね」

「無免の素人が馬より速い車を運転してたら
大変だろ？」

「まあ…それもそうよね…」

基地へ帰る途中、

「おいそこの変な馬に乗ってる奴ら！有り金よこしな！」

「浩二！盗賊よ！」

トリステインにももちろん盗賊はいる

珍しい乗り物にのっている中川達に目をつけたのだ

「心配するな、振り切ってやる」

「無茶よ！」

「地球の科学とやらを見せる時だ」

アクセル全開でぶっ飛ばした

このへんの道路は状態がよく60キロぐらいは出しても平気だった

盗賊の馬は追いかけるもくろがねにおいつくことはできなかった

「すごい…振り切っちゃった…」

くろがねは他国の車に比べて

遅れていたが現在ハルケギニアでは最も速い自動車である

くろがねはこのまんま飛ばして基地へ向かった
その途中だ

「うっ…」

「ルイズ、大丈夫か？」

「は…はきそっ…」

ルイズが吐き気を訴える
どうやら乗り物酔いしたらしい

「弱い娘だな」

山下が呟く

「失礼な！あんただってただのデ…おえ！」

「ルイズ、吐くんならあっちで吐いてこい」

「う、うるさい！」

その後、ルイズが吐いたりしたりで大変だった、だが調子もよくなったことなので再び出発といきたいところだったが

「うわあ！鉄の馬だ！」

ならか叫び声が聞こえた
このあたりにすんでいる平民だ

「あ…あわわ…」

くろがねにおどろいているらしい

「驚くことはないですよ、武器はついてません」

「よ…よかつたあ…」

彼の名はルソー、貴族らしい
タルブ降下戦にて家を破壊されこのあたりに家を建ててすんでいるらしい

「はあ…幸い財産は無事でしたので…仮設住宅に今住んでおりますが…」

妙に丁寧なのは中川が独軍将校の軍服に勲章たくさんつけた服をきていること

トリストイン屈指の名門貴族出身のルイズの事を知っている事
山下も陸軍将校の服をきている事

ルイズがいるからヴァリエール家の人間だと思っただけらしい

「いやあ、今家建ててもらった人にお礼としてこのタルブ産高級料理こと
『ヨシエナヴェ』をプレゼントしようとしていたところでした…」

どうみても寄せ鍋です本当にありがとございました

「その人、近所に住んでいた武雄爺さんに似たような雰囲気だったので
喜ぶかなとおもいました」

「武雄？」

佐々木武雄少尉の事だとすぐにわかった

しかしその佐々木に似ている雰囲気を持つ者としたら日本人しかい

ない

この付近に日本人が住んでいる！

「その人にあわせてもらえませんか？」

「えっ？いいですよ？」

「すぐ近くです」

くろがねは3人乗りなので

ルソーを後ろのタイヤのところのせた

「ひ、ひいいい！！」

「やかましい男だ…」

ルソーは恐怖のあまり叫ぶ

うるさいわ唾はかかるわ山下にはいい迷惑だ

「1111です…」

そこには木造の一軒家と格納庫がある

コンコン

「あっ！加藤さん、お久しぶりです！」

「加藤？」

どうみても日本人の名前だ

「やあ、ルソーか」

「これ、どうぞ」

「ああ、すまない」

「本当にありがとうございました」

「こないだこていなんだかをかけてくれたおかえしですよ」
「ん？」

「!?!」

「ん？君は？」

「山下中将!?!」

「加藤君か！？隼戦闘隊の!?!」

「加藤…？もしかして陸軍飛行第64戦隊の!?!」

「だ、誰？」

加藤建夫、北海道上川郡東旭川村（現旭川市東旭川町）出身
日中戦争で初陣を飾った後、数々の戦果をあげ太平洋戦争開戦以来
飛行第64戦隊、通称「加藤隼戦闘隊」の隊長を務め
華々しい戦果をあげた

しかし、1942年5月22日、ベンガル湾上空にて

ブレニム爆撃機の後上方銃座により加藤機は被弾機を反転し海面に突入し壮烈な自爆を遂げた

そして、中佐から少将に昇進、軍神として称えられた

「たしかに私は、海に突っ込みました
しかし気がついたらここの上空を飛んでいまして、
途中で気がかわったのか着陸させました」

「それで、隼は？」

「はい、どうにか修理しました
そこに現れたこのルソー君が隼にこていなんだかってやつをかけて
現在にいたります」

「今から2年前の話ですね」

どうやら加藤少将は海からハルケギニアにきてしまったらしいのだ
ちなみに本人は少将に昇進した事は知らない

その後、交渉した結果…

新たに加藤少将が加わった

歩兵20人

戦車6両

航空機4機、うち戦闘機3機

だいたい義勇軍の戦力はこんな感じである

…軍とはいが実質の規模は一個中隊レベルである

しかも飛行機が足りない

輸送機11名全員が飛行機を操縦できるパイロットなのに

現在飛行機があたっているのは西澤とイエーガー、そして新たに加わった加藤少将のみである

しかもその中の輸送機メンバーは西澤のみである

また戦闘機や輸送機だけでなく攻撃機や爆撃機もほしいところだ

4 軍神加藤（後書き）

ご意見、ご感想などがいましたらお気軽にどうぞ

5 少女(前書き)

今回より小悪魔と春風の協奏曲編…ですが
原作とは遠くかけはなれていますので
ご注意ください

5 少女

決戦へ向け軍拡を進める最中

怪しげな影がラ・ロシエールの基地へ迫っていた

「なんだ!？」

突然基地内で爆音が響く

日本陸軍出身の義勇兵二名(…)といっても義勇軍の兵士は日本人ばかりだが(…)

が爆発音が聞こえた場所へ急行

「な、なんだ貴様は!？」

見慣れない少女がいた

髪の色などから日本人だとはわかったが

彼らの知る祖国日本にはあんな服を着ている女の子はいない

少女は不気味な笑みを浮かべその場所から消えた

「な…なんだったんだ？」

「我々は疲れすぎて幻覚でも見ていたのでしょうか？」

翌朝 -

「こりゃひどいわね…」

「復旧には2、3日かかりそうだな」

ルイズと中川が半ば呆れた表情で
惨状を見た

「尾上、お前昨日ここいらを警備していたろ、なにかいたか？」

「はい！実は爆発地点であるここへ駆けつけたら変な女の子がいます！」

その子は笑みを浮かべて消えてしまいました」

「消えた？」

「あやしいわね…」

そこに山下大将がやってきた

「どうだね？」

「はい、幸い弾薬に引火しませんでしたので

2、3日もあれば復旧できます」

「そうか、あんな連中もいるものなんだな

ここいらの警備を強化しなければな」

「弾薬庫に引火すれば基地がぶっ飛んでしまう」

「わかりました、本日より10人体制で警備いたします」

「うむ、頼むぞ」

10時頃、ルイズと中川は昼食の買出しへ行った
理由は簡単、料理できるやつなど中川ぐらいしかいないからである
ルイズはご主人様として同行だ

「燃料は？」

「満タンです」

「よし、いくぞ」

「うん」

ボタン、

ドアを閉めエンジンをかける

くろがねは走り出した、加速は馬よりもいい

「今思ったけど乗り心地悪いわねこれ」

「軍用車だからしょうがないだろ、我慢してくれ」

「命令するなあ！」

「はいはい」

すぐにラ・ロシエールの街へ到着した

山間の都市であるこの街は空飛ぶフネで栄えたものの最近はアルビ
オンがああなので

空飛ぶフネすらなくなり唯一の産業がなくなった今、それはそれはソ連のような状態だった

「うっわ…失業者だらけね…」

とりあえずひとつの店に入った

「ん？なんだあ？食い物か？」

「買っんならさっさと買ってけ」

随分態度の悪い店員だ

そして店の中がらっから…

「お前ら…今店になにもないと思ったる」

「ギクッ！」

「いいか？ラ・ロシエールは一見綺麗な街に見えて

実はモスクワ大公国とおんなじ状況なんだよ」

「モ…モスクワ？」

どうみてもロシアです本当にありがとうございました

「なんでえおめえモスクワ大公国しらねえのか？」

「ゲルマニアよりも東にある大国…だったんだけど

なんでも数十年前から財政難に悩まされて、でも軍隊は強いんだよなあ」

「ゲルマニアが一度攻めにいって負けたほどだ」

名前こそ違つがハルケギニアでいうソ連だろう
いや…国名からして共産主義国家ではなさそうだが

「あの…そのモスクワ大公国とかどうでもいいので食べ物…」

「おつといけねえ、ほらよ」

ついでにルイズの服も買うことになった
別に断つてもよかつたがおしおきが怖いので付き合つことにした

「どつ浩…？似合つ…？」

似合つかなんてわからない
とりあえず似合つと答えといた

「そつ…」

中川は最近ルイズが、使い魔に対する態度が
甘くなつたというか…あれだ、タルブ戦以来ルイズの態度は180
度とまではいかないが
90度ぐらいかわつた気がしたらしい

帰り道 -

「なあルイズ、ソ連つて知つてるか？」

「なにそれ？知つてるわけないでしょ」

ハルケギニアの人間が知つてるわけない
いや、これだけ地球の産物がでてくるんだから一人くらい知つてる

かもしれないが

「ソ連つてさっきのおじさんが話してたみたいな国が革命で王制が倒れた国だ」

「へえ、それで？」

その後、共産主義について簡単に中川は説明した
その内容にはルイズは断固反対した

「覚えておけ、いかに金がなくても共産主義だけには走るな」

「う…うん…」

(私に言われてもわからないっての)

「ん!？」

その時、何かを目撃した中川は車を急に止めた

「いてて…ちょっと危ないじゃないの!！」

「人が倒れている」

「えっ?」

「嘘!本当に倒れている!」

黒髪、ロングヘア、ハルケギニアの人間には見られない
独特の顔つき…少女は日本人のようだ

呼吸しているか、脈はあるかを調べようとした…

「ちよつとまった！私がする…」

「えっ？」

「えっ！？じゃないでしょ！アンタがやるとついでで変なところ触りそう！」

「馬鹿野郎、有事の時にそんなことしてる暇などないわ」

脈はある、呼吸もある、気を失っているだけみたいだ

「とにかく、人を呼びましょう」

「そうだな、このまま後ろの座席に乗せればいいが食料がたくさんでのれないしな」

「基地は近い、ルイズ、車を見張っててくれ」

「うん」

しかしその時、謎の魔道士らしき輩が2名現れた

「その女をよこしな？」

「ん？」

「なんだ？あの怪しげな二人は？」

「お前らに知る必要はない、よこせ」

「引き渡さなければどうなる？」

「命はないぜ？」

中川に少女を引き渡すよう命令した魔道士、
もし引き渡さないのなら中川達の命はないという
しかし中川は軍人、こんな場合も冷静に対処した

「ルイズ、その娘を頼んだ」

「うっ…わかった」

中川は腰に携帯している十四年式拳銃を手にとった

「もし攻撃してきたらこちらも抵抗させてもらおう」

「なんだあ！銃かよ！しかもちっせえ！敵じゃねえぜこんな奴！」
「相棒！行くぞ！」

「おう！」

二人は魔法を放ってきた

「浩二！」

しかし中川はそれを間一髪で交わすことができた

地面にゴロゴロ転がり止まったところで
照準を合わせる

魔道士は魔法を詠唱しているみたいだ
その隙に一発発砲した

「ぐわぁ！」

「おっ！おい相棒！」

「ちっ！お…おぼえてろ！」

相棒があっさり殺され

焦ったのかもう一人は瞬く間に逃走した

「ふう…」

「すごいじゃないの！あんなにあっさり追っ払うなんて！」
「まあギーシュを倒しただけあるわね」

その後、ルイズが医務室まで運んだ

中川は自動車の移動と食材の輸送を行った

5 少女（後書き）

ご意見、ご感想などがいましたらお気軽にどうぞ

6 中川の曾孫！？

医務室、医者免許を持っているルソーが言うに
ただ気絶しているだけで命に別状はなしとの事だ

翌日、中川は医務室を訪れてみた

「どうだい？彼女は？」

「シート、まだ寝ております」

「ハハハッ すまんすまん」

「ん…んん？」

「おや、お目覚めでありますか？」

少女はあたりを見回した

自分は一体どこにいるんだろうか？わからない事だらけだろう

「あ、あれ？」

「どこ…どこ？」

やっぱりだ、自分が今どこにいるのかを
考えていたみたいだ

「えっと…ですね」

中川はすべてを説明した

すべてを説明するのに約10分ほどかかった

「…というわけであります」

「…」

「な…なんか…理解不能…」

彼女にとっての常識からは考えられない事ばかりだ
まず、異世界などあるわけない
そして、日本軍はもうないはずだ
さらに、死んだはずの軍人がなせここに？

中川の説明を聞いたら余計わからなくなってしまったようだ

今度は少女が事情を説明した

少女のいる世界の事、今までのことなど

（そうか…戦争は終わったのか…）

ここで初めて、…大東亜戦争、…の終結を知った

（横井兵長、霧島少尉、戦争は終わりました…）

これですべて終わりです、安心して安らかにお眠りください

天の二人に心で戦争の終結を知らせた

また戦後、日本は奇跡的に復興したことも知り中川は安心した
少女は、高凧春奈という名前らしい

一時間が経過し春奈は大分この世界の事、中川達がこうなっ
つた

経歴を理解してくれた

「あの、そういえば貴方のお名前は？」

春奈は中川の名前を聞いてきた

「私ですか？自分は、中川浩二、元日本陸軍伍長であります」

元、というなは現在大日本義勇軍の大佐

（本来もつと偉くされる予定だったが前線で戦うための本人の希望により）

だからである

その名前を聞いて春奈はちよつと驚いた

「中川…浩二？」

聞いたことある名前らしい

ガチャ

「ん？ルイズか」

「浩二、その人目が覚めたの？」

「あ？うん」

「！！！」

（曾お爺ちゃん！？）

そう、今も辛うじて生きている曾おじいさんのお前と同じらしい

「ん？そういえばあんた達二人ってちょっと似てない？」

ルイズも指摘する

しかし、もし春奈の曾祖父だったら歴史が狂う

この世界に永住する事に決めた中川には当然地球では子供が生まれない

したがって春奈は誕生しないしハルケギニアに入り込んだ瞬間未来の春奈は消えてしまう

しかし目の前には春奈の姿がある

春奈が言つに曾祖父、中川浩二は90を超えた今でも元気であるという

数日前に会ったばかりだという

（もしま？地球とハルケギニアでちょっとズレているのでは？）

そう思った、別次元があると、いやなければ春奈なんて存在しない

（しかしそういう事は…考えると難しいし…おいておくか）

軍令部

「最近、なんでもトリスティンの各地で爆破事件が多発しているよ
うだ」

「我が軍だけではなく、学院や王都でも被害がでたらしい」

「一体何者が…？」

「現状では不明である」

「とりあえず、情報部に伝えておいてくれ、今後も全力で捜査を続けてくれと」

また、爆破事件防止の為に、嚴重警備されたし」

山下は冷静に物事を判断する

流石はシンガポールを制した名将である

情報部とは一昨日、ラ・ロシエールの失業者8名で編成された外部の情報をかき集める大日本義勇軍の秘密組織である

外国の情報はもちろん国内や王室の極秘情報までもを入手する事が目的だ

彼らの最初の任務が爆破事件の犯人の正体を探る事だ

トリステイン軍の元軍人、シャルル中佐が情報将校としてこの部隊の隊長を務めている

8名のうち4名は白兵戦を行える人間である

三八式歩兵銃とトリステイン製の短剣、山下率いる日本軍が持ち込んだ手榴弾で武装し

決死の情報収集すらできる先鋭部隊だ

この歩兵銃は予備品である

義勇軍には兵器製造技術がない

弾は複製してくれるので困る事はないだろうが

一つでも戦いで壊れたら兵器不足に陥ってしまう

そんな問題を抱えつつも
次第に軍隊としての機能は整いつつあった

三日後の夜 -

「アベル中尉」

アベルとは陸戦隊の隊長である
シャルル同様情報将校だ…
というか情報部には情報将校しかいない

「本当に少女はここに出現するのでありましようか？」

「間違いない、今までの移動経路から推測するに、ここ以外には
考えられない」

「ザザ…」

何者かの気配を感じ
短刀を抜く

「待て！全然違うぞ！」

「な…なんだ、民間人か…」

「ん？」

「まずい！こちらに気が付いたぞ！」

「貴方達、なんでしょうか？」

「…」

「ここは適当にごまかしておくべきだろう」

「警察です」

「警察？そうには見えませんでした…」

「はっ！実は最近爆破事件が多発しているとの事で、特別に重武装を許されたのであります！」

「そうなんですか？」

「女はちょっと獣が入ってる
耳とかあるし」

「でも怪しい、似たような服装をしている集団で行動している」

「あの…貴方達はなんかの団体ですか？」

「アベル中尉が問う」

「はい、我々は劇団です、私は座長のヴェザリーと申します」

「劇団？」

「あの、この後公演があるので」

「うーん、どうしますか中尉？」

「ちょっと怪しいが、ここは誰の領地でもないしな
よし、行っていい」

「では、急いでいるので…」

ヴェザリーと名乗る女とその後ろにいる集団は去っていった

「…しかし…」

「わかったな？我々は訓練が足りない」

「えっ？」

「バレてしまつては秘密も糞もないだろう、これではすぐに
我々はスパイだとバレてしまつてはいないか？」

「…そうですね…」

怪しい奴、平成の日本から来た春奈
連続爆破事件、近い時期なんかありそうだ

6 中川の曾孫！？（後書き）

ご意見、ご感想などがいましたらお気軽にどうぞ

なお、史実で中川がどうやって終戦まで生き残ったかはいずれ、

7 春奈の謎

翌日 -

パアン！

これは空砲です

軍隊ではあたりまえ、大日本義勇軍でも訓練が行われている日本軍出身者が多い為、訓練は非常に厳しいその分、兵士は皆精鋭だ

育てられる兵士達も精鋭に育つだろう

戦車兵の訓練も厳しい

特に日本の戦車は質ではなく精神力が強さをあらわすものなので特に厳しい訓練が行われた

身体、技術、頭脳などすべての面で

ハルケギニアで一番スパルタな訓練を行う兵科だろう

一方、零戦、ヘルキツヤト、隼、零式輸送機で編成された航空隊は小規模で飛行機がたりない

10人以上いるパイロットを精鋭操縦士に育て上げるには一機で何人もの人間を訓練しなければならなかった

ちなみに海軍はない
艦艇もなければ人もいないし軍港もない

一方中川は -

戦車に車載してあつた電報を数機取り外し
連絡用に使っていた

電話など高度なものはないからである

「ん？電報だ？」

「すごいわねこれ、文字がでてくるんだ、読めないけど……」

ハルケギニアの文字しか読めないルイスが
日本語を読めるわけない

「情報部からだ」

「事件発生、ラ・ロシエールノ中央ニテ爆発」

「またこっちに来てるみたいね」

「まさか次は基地だとかじゃないよな、ん？まだ続きが」

「不審ナ集団接近セリ」

「不審な集団？」

その夜 -

「…」

「なんだ貴様!？」

「ん…?」

外から声が聞こえた

夜だつてのにうるさいぞと思いつつ中川は外を見た

一瞬どこかで見えた人影が写ったがその人影も

5秒もしないうちに消えた

兵士は追うも10分後に引き返してきた

「なにがありました?」

「いえ、不審人物を」

「これは?」

「不審人物が置いていったものでしょうか?」

「どれ…気を付けて開ける」

「はい」

箱を開ければそこには火薬が沢山だ

これほどの量なら火がついたら半径5メートル以内の範囲はドカンだ

「まさか爆破事件の犯人か？」

ドガアアン

その時、激しい爆音が

「な！？なんだ！？」

後ろを見れば炎が、明るい、そして輻射熱がくるのか、でも離れて
いる、暖かい

そこへ中川達の元に警備を行っていた9人とルイズがきた

「うるさいわね！今の爆発なによ！？」

「説明は後だ！とにかくゆくぞ！」

元日本兵達は一斉に走り出した
ルイズはむすつとした表情で彼らを見ていた

「ん？」

なんかのひょううしで春奈の部屋をのぞいた
しかし春奈はいない

「えっ！？嘘！？」

春奈がないわけない
おかしい、明らかに

「高風春奈って女どこいったのよ!？」

その時1人の元日本兵が来た

「どうされました!？」

「高風春奈がないの!」

「なんだって!?!今ですか？」

「今ですかって、じゃあいつなのよ!？」

「…関連がありそうですな」

この男、市丸という陸軍軍曹だが

春奈がいなくなったのと爆破事件が発生したのがほぼ同時という事もあり

なんらかの関連があるとよんだ

「ルイズさん!貴女はあちらを探していただけますか？」

「えっ?でもそれ情報部の仕事じゃ…」

「そんな事行ってる暇はありません、とにかく、見つけ次第捕らえるのです」

「わ…わかったわ」

二人は二手に別れ消えた春奈の捜索に向かった

一方・

小銃を構え、事件現場周辺にて
犯人を捜していた

「畜生…どこに逃げやがった？」

「中井曹長！変な少女がこちらに！」

「なに！？ お前ら！二手にわかれろ、

村井と飯田は中川大佐の所へ、私と木之本は高木の所へ行くぞ！」

「了解！」

二グループに別れ
行動した

村井グループ・

「中川大佐！」

「ん？どうした？」

「犯人らしき人物が発見されたとの事です！」

「よし！行こう」

ルイス・

「んもお…春奈つたらどこいったのよ？」

ルイズは小走りで春奈を探す

こんな時だけに他人でもちよっと心配なのだ

その時

ドンッ

「いたっ！」

「いてて…」

「ちよっとアンタ気をつけなさ…浩二？」

「ん？ルイズ？どうしてここに」

「どうでもいいわ！気をつけなさいよ！」

「はいはい、えっと…村井！どっちだ？」

「はい！こちらです」

「よし！」

中川達は全速力で走った

「あっ！待ちなさいよ！」

ルイズもその後を追う

中井グループ

「曹長！こちらです！」

「ん！？」

中井曹長が見たものは

…春奈にそっくり…いや同一人物にも見える少女だ

「何者だ！？」

「ちっ、ヴェザリー様に報告する前につかまるわけには…」

春奈…の後ろには援軍が

中川達だ、今駆けつけた模様だ

「ん？ 村井！あいつか！？」

「さ…さあ？」

「こいつが犯人です！」

高木が教えた

どうもこの少女が犯人らしいが

「どうみても…あの娘春奈じゃないの！」

ルイズがいう

そっぴいえば似ている…服装も同じだ

少女にとって今、修羅場である
包囲されたのだ

「お前は包囲されている！直ちに投降しなければ攻撃する！」

「ちっ」

春奈は逃げ出した

「待て！」

義勇兵は追う

「ルイズ！戦車隊に伝えてくれ！道をふさげと！」

「な、なんで私！？」

「俺たちは戦わなければならないかもしれないかもしれん！
ここで頼めるのはお前だけだ！」

「うっ…しょうがないわね！」

ルイズは嫌々中川の用件をきき
戦車隊がいる場所へ向かった

一方中川ら義勇兵は
春奈を追う

「待て！」

その時だ！

春奈は火炎瓶を投げってきた！

「伏せる！」

火炎瓶は燃え上がる

「ああああ！！！！」

「村井！」

「おい！そこに水が溜めてある！すぐに消火しろ！」

必死の消火活動により村井は軽いやけどで済んだ
しかし春奈はまた火炎瓶を投げってきた

「畜生…このままではこちらが焼け死んでしまう…」

「中川大佐！」

中井曹長が中川をよんだ

「なんだ！？」

「私は突撃を敢行します！ その隙に彼女の身柄を！」

「やめろ！危険だぞ！？」

「貴方も帝國軍人ならわかるはずです！」

我々は死など恐れません！お国の為に死ねと教育されたでしょ！」

「しかしだな…義勇軍の戦力は弱小で…」

「心配しないでください、私は生きて帰る自信があります…」

「中井…よし、がんばってくれ」

「ありがとうございます！」

中井は中川にピシッと陸軍式の敬礼をした

中川も同様に敬礼した

そして火炎瓶が飛び交う中に中井曹長は突撃を敢行した

「うおおおお！！！」

「大日本帝国万歳！！！！！」

「天皇陛下万歳！！！！！！！」

お馴染みの掛け声をあげ

春奈の元へ突撃する

当然春奈は中井を攻撃目標にする

その隙に中川、高木、飯田、木之本は春奈の後ろに回りこむ

ガシッ！

そして中川は春奈の体を固定した

「は、放せ！放せ！」

ドスッ！っという音がした

中川の横っ腹に肘を突いた

「うっ！」

一瞬横っ腹に痛みが走る

春奈は効果ありと認識して連続して攻撃を仕掛ける

「貴様！」

そこへ中井が仲介

春奈の腹を思いつき殴った

「うっ！！！」

春奈は急に大人しくなった…
体を放すと倒れこんだ

「うっ…！」

「どうしますか？」

「念の為、身柄を拘束しておけ」

「わかりました！」

中井と木之本が春奈を連れて行った直後

沢山の戦車の走行音と共にルイズがやってきた

「浩二、約束どおり道を封鎖させるように言ったよ」

「そうか、悪いけどもうその必要はない」

「はあ！じゃあ私はなんの為に！？」

「いや…その…」

「もう！久々に怒った！おしおきしてあげるわ！」

「ひい！」

その後、久々にすごく怒ったルイズに

中川はおしおきされた

あんまり痛くはなかったが…

春奈は基地の狭い部屋に収容、廊下に2名、中に2名、屋外に8名の態勢で

警備を行っていた

7 春奈の謎（後書き）

ご意見、ご感想などがいましたらお気軽にどうぞ

8 ヴェザリーを追え！

その後、中川が代表として情報部へ報告に行った話は数十分に及んだ

「そういえばヴェザリー様なんても言っていましたな」

「ヴェザリー、ですか？」

「ヴェザリーだと！？間違いない！この前我々と遭遇した劇団の座長じゃないか！..」

「どづいつことでしょうね..」

「とりあえず、引き続きヴェザリーとなんらかの関連がありそうである

高風春奈の監視を続けたいと思います」

「頼みますよ」

「はい、そちらも情報収集、がんばってください」

そういつて中川は部屋から出て

しばらく廊下を歩いた、そして中井曹長と出会った

「どづだ？」

「はい、今から軍法会議を行うところです」

「そうか…」

不思議な感じだ

「ところで大佐、その傷は？」

「ん？ああ、戦傷だ」

本当はルイズにやられたのだが
そんな事恥ずかしくて言えない

翌日 -

春奈についての軍法会議が行われた

裁判所なんてものがない為、かわりに軍法会議で裁くことにしたのだ

「なんだと！？なにも覚えてないだど！？」

「は…はい…」

中井曹長が春奈に怒鳴りつける

春奈はちよつと涙目だ、震えている感じもする、中井が怖いのだろ
うか

「貴様！散々物ぶつ壊しといて！しかも村井は軽いんだが
火傷まで負つたのだぞ！」

「でで…でも…私は…ほんとうに…」

「なんだと！？聞こえんぞ！」

「は…はい…！」

「中井曹長、あまり攻めないでもらいたい」

そういったのは山下の部下の20人の歩兵の中で最も偉い橋中佐だ

「し、しかし…！」

「怯えているではないか？」

「こんなじゃ彼女も答える気にはならんだろう」

「は…はあ…！」

橋中佐は冷静であつた

「すまない、中井は根はいい奴だ、許してやってくれ」

「…はい…！」

咎める気はない橋にさえ恐怖心を

覚えるほど中井は物凄く春奈に怒鳴つた

軍法会議なので明るい話ではないが

それでも会議室は、いつもの軍法会議よりも暗い

「すみません…本当に何も覚えていません…」

「だから何故だ!？」

「中井！」

「うっ…」

「そうですか…いい、君に罪はなさそうだ」

「ほ…本当ですか!？」

「腹を殴られただけで記憶を失うとは思えないですし

それに今の君とは性格も180度違った」

「こついえばうそ臭く感じるが…何者かに操られていたかのようだ」

「え?」

「すまない、よくわからなかったか、いいですよ、高風さんに罪はありません」

「あ…ありがとうございました!」

春奈は部屋からでていった

春奈が出て行った後橋の元に中井が来た

「中佐、いいのですか?」

「中井、彼女は多分、何者かに操られていたのだと思うよ?」

「えっ?」

ほかの義勇兵も驚く

ただしたまたま会議にいたルソーは驚きもしなかった

「僕もそう思いますよ」

「そんな事が!？」

「あります、メイジの中には操る魔法を使える者もいます」

「そ…そうなのですか？」

「ええ」

ガチャッ

ドアが突然開いた

そこには情報部のシャルル中佐がいた

「失礼します！彼女を操っていたと思われる人物が判明しました」

「なに？」

「彼がいつのなら…本当に高風さんは操られていたのか」

「ヴェザリーという劇団の獣人が混じった女性です」

「それで？その人は？」

「ラ・ロシエールの街にいます」

「そうか」

「失礼しました」

ボタン

次々と明らかになる事実

ここで義勇軍がとる行動といえばただ一つ
ヴェザリーの身柄を拘束する事だ

このような事件をまた起こされてはたまらない
早期解決の為に捕らえる必要がある

夕方、情報部

「劇団員の数は？」

「まだわかりません」

「だいたいの数は？」

「かなり多いと」

「本日は？」

「ラ・ロシエールの宿です」

「そうか…それを伝え、

山下大将の出撃命令が出次第、我々は行動に移します」

「ええ、そのさいは我々も最新の情報を提供したいと思います」

「うむ、頼みますぞ」

こうして夜、ヴェザリー逮捕へ向けての
作戦が立案された、

作戦名は「索号作戦」、文字通りヴェザリーを探すための作戦である
歩兵全員と元々歩兵であった中川大佐を含む21人が宿へ乗り込み、
ヴェザリーを包囲、
ヴェザリーの身柄を拘束、攻撃してきた場合は交戦を認めるとい
うものだ

今夜、この作戦は発動した

ここまでの行動はトリスティン政府よりも早い
小規模ながら義勇軍の力強さが伺える

8 ヴェザリーを追え！（後書き）

ご意見、ご感想などがいましたらお気軽にどうぞ

なお、作戦名は（平仮名か片仮名か漢字）号作戦

としておけば日本ぽいかなという勝ってな考えですorz

9 番号作戦

夜12時頃 -

「大将、命令を」

「うむ、時間的に言えばそろそろだ…よし、作戦開始」

「わかりました」

各部隊に作戦開始と
報告が回り出動した

出動準備はすでに終わっていた

一方中川 -

「つで、なんでルイズもいるんだ？」

何故かルイズがついてきた

「見張りよ、アンタの場合襲うかもしれないじゃない」

「襲うわけないだろ普通…」

「まあ、アンタのご主人様だしついていくのは妥当でしょ？」

「しょうがないな、足引っ張るなよ」

「私は名門貴族ヴァリエール家の生まれよ、すくなくとも元平民よりは
使えるわ」

なんて調子のいい事言ってるが
虚無以外の魔法は使えない
しかも失敗するかもしれないのだから頼りあるんだかないんだ
が微妙だ

日があけて0時23分、ついに宿の前まできた

うるさくせぬよう手で合図する

うるさくすればヴェザリーにも知られてしまう
こっそりと5人ずつにわかれ宿内に潜入した
中川とルイズも2人で行動、宿内に潜入した

一番最初にヴェザリーの部屋に到着したのは
中川&ルイズのペアだった

「読めるか？」

「ヴェザリー…間違いはないわ！この部屋よ！」

「シート！ばれたらどうする…！」

「なによ、捕らえるんでしょ？どうせバレるんだから」

「バレるのは行動に入ってからだ、現状でバレたら
作戦は高確率で失敗する」

「…よし…」

「突撃！」

「わかりました」

「バタッ！」

すごい勢いで扉を開け途中で合流した高木隊を突撃させた

「えっ！？ な、なに！？」

高木がロープでヴェザリーの手を縛り付けた

「よし、撤収！」

「ちょっとなんなのよ！」

「すべてわかっている！ちょっとこいヴェザリー！」

「！！！」

（なんで？なんで私の名前を！？）

ヴェザリーの心境は一つ「信じられない」

なぜ自分が見も知らぬ連中に捕らえられたのか

しかし義勇軍の作戦は成功した、一度も戦闘がおこらず負傷者も出ず
ヴェザリーを捕らえる事に成功した

会議室 -

山下大将自らがヴェザリーと話した

「…完敗ね…」

「全部見抜いていたなんて」

「ごういう場合、とくにごういう国は役に立たないので

我々がかわりに戦ったまでです」

「さて、事情を説明してもらいましょうか？」

「それを聞いた後、国に引き渡します」

「ふん…まあいい、私は負けた身ですし」

すべてを話した

春奈に秋奈という人格を受け付けた

これまでの爆破事件はクーデターの予告にすぎんとの事だ

彼女の一家を迫害するこの国をひっくりがえし貴族やメイジが物を
言う

世界を変える目的らしい

「お気持ちはよくわかります、ですが、迫害には貴女自身にも責任
はあります」

「えっ」

「貴女の人を操る魔法です、人が人をうごかすのなんて

とんでもないでしょう」

「情報部の情報によるとですがね」

そう、山下の知っている事は情報部より知らされた事のみである

山下自身この世界に来て浅いのでまだ魔法についてもよくわからない

「…そうですか…ツハハハ」

「なにが面白いのですか？」

「本当に完敗だわ、いいわ、もう本国へ引き渡しても」

「春奈から秋奈という人格も取り除いてあげる」

「私の人生にもう未練はないわ、ツハハハ」

「むしろこれほどあっさり負けたのは気持ちいいわ」

そういつて、春奈から秋奈という人格を取り除き

連行ではなく、自ら出頭した

春奈は行き場がないのでしばらく

大日本義勇軍の基地に住む事にしたが仕事をしないわけにもいかないので

とりあえず不足していた清掃員の仕事をやらせた

もちろんそれなりの給料は支払う

「まあ…いいか、どうせ帰れないんだし」

「住処があつて仕事がある分マシか」

そうつぶやいて仕事を続けた

9 索号作戦（後書き）

ご意見、ご感想などがいましたらお気軽にどうぞ
次回はようやく大艦巨砲主義の象徴、だがそれがいい
あの巨大戦艦の登場です

10 鉄の島

あれから3日後、義勇軍におもしろい情報が入った

西澤広義と同期の仲本飛曹長、そして中川とルイズが山下に呼び出された

「実はですな、情報部からおもしろい情報が入りまして」

「それはなんででありましょうか？」

「なんでもダンゲルテールの港には一週間前、突然鉄の島が現れ浮かんでいるらしい」

「鉄の島？」

「私は詳しい事はわからないが、おそらく海軍の軍艦ではないかと思っただ」

「ちよつと四人で見にいつてくれないか？」

「山下大将、質問があります」

「ん？」

「海軍の話ですよ？何故陸軍の自分とルイズも行く必要があるのですか？」

「そつよ、私達関係ないじゃない」

山下はあっさり答えた

「理由は簡単です、義勇軍設立の考案者であります
中川大佐に是非とも見てもらいたいと思ったのです」

「は…はあ…」

「それと、一応ルイズの使い魔なのだろう
ご主人様も同行のほうがよいかと」

「なるほど…まあ見ても損はしないでしょう、いつてまいります」

「うむ、頼むぞ」

こうしても西澤、仲本ら海軍とルイズとその使い魔の中川も
『鉄の島』があるダングルテルへと向かう事になった

滑走路

バババ…

零式輸送機のエンジンが掛かる

「私始めて飛行機とかいうのに乗ったわ…」

「大丈夫だ、車よりは酔いずらいと思う」

「よし、離陸しますぞ、ベルトを」

「はい」

「ルイズ、ベルトはしろよ」

「う、うるさい！もうしてるもん！」

ルイズはちよつと怒った表情で反論した

そして、零式輸送機は大空へと飛んでいった

銃弾の跡があつたがこれはお雇いメイジのおかげで
なんとか修理した

元々旅客機だけあつたこの輸送機は航続距離が長い
ダングルテールまで行って帰るには十分な航続距離だ

その後 -

「お、集落が見えてきましたぞ」

「あそこですね、ダングルテールは」

「な…なんじゃありゃ？軍艦？」

西澤の目に見えたものは軍艦だ

「なんですって？」

中川がきた

「軍艦とは…本当ですか？」

「ほら、あれ」

「…本当だ、どこの船かはわからないが、ありや軍艦ですな」

「やったあ！鉄の島は本当にありましたあ！」

日本兵は喜ぶがルイズは話にまったくついていけない

「さ、着陸しましょう、草原ですから着陸には問題なさそうです」

零式輸送機は着陸態勢に入った

全員ベルトを装着

ゆっくりと輸送機は草原に着陸した

「さて、ここより数百メートル離れた場所ですね」

「ええ」

一方、ダンゲルテールの僅かな村民は目を点にして見ていた

「そつだ、誰か見張りをつけないと盗難事件にあいそつですな」

「仲本、頼めるか？」

「はい！自分は我慢いたします！」

こうして仲本を見張りにし

3人は港へ向かった

「しっかし本当に廃れた町ですね」

「虐殺があつたのよ」

「虐殺？」

「そうよ、20年くらい前にね」

「私は生まれてないから知らないけど…」

「ふ〜ん」

話しながら歩いていると一向は
港に到着した

港

「…これは…」

「ん？西澤、知っているのですか？」

「間違いありません…こいつは…戦艦大和です」

「大和？あのやたらでかい連合艦隊の戦艦か」

港に停泊していたのは

なんと、日本海軍が世界に誇る、世界最大の戦艦『大和』である

46センチ砲9門、排水量は基準 65,000トン、カタパルト
2基、搭載機6機

そして並外れた防御力を備えた桁外れの戦艦である

1941年に就役してிரை連合艦隊の旗艦になった

だが、皮肉にも当時の日本の最高技術を結集し建造されたこの最大の戦艦は

戦艦らしい活躍をほとんど見せず坊ノ岬沖で撃沈された…はずだ

「だ…誰だ!？」

「!？」

突然声をあげたのは大和乗組員だろうか将校がやってきた

「…もしや日本軍ですか？」

「…は…はい」

「まさか…我々以外にも日本軍がいたとは…」

「鉄の島の噂を聞いてやってまいりました、まさかこちらも戦艦大和があるなんて思ってもいませんでした」

「…とりあえず少々、お待ちください」

将校は船の中へ去った、だがしばらくするとその将校は走ってきた

「閣下が是非面会したいとのことだ、乗艦を許可します」

中川・西澤・ルイズの三人は大和への乗艦を許可された

その後、大和に乗り込むも三人ともその規模に圧倒された

特にルイズは鉄でできた艦艇など始めてみたので言葉がでなかった

三人は艦長らがいる操縦室へ向かった

その途中、ルイズが中川に質問してきた

「ねえ浩二、これってなんの船？」

「戦艦と違って、俺は陸軍だから詳しくないが
まあ海戦で戦う船、つまり戦争用だよ」

「戦争って、こんなすごいのが戦争用なの？
浩二の世界の戦争ってどんな感じなの？」

「ん…一言でいえばさまざま」

「この世界の戦争の比ではない」

「たとえばこの大和のような船…といってもほかのは大和よりは小さいが

そんなのが沢山、俺の国にも敵の国にもある」

「海の上ではこの世界の国を一国なら滅ぼせるかもしれない威力の大砲で

撃ちあったり、船から初艦してこの世界でいう竜の羽衣みたいなのが

空で機銃を撃ちあったり」

「陸では機械化した歩兵やこの世界のよりも性能が遙かに上の火砲やこの

世界には俺たちが持ってきたもの以外ない戦車などが激戦を繰り広げたり」

「なんでも一番は国家が総力をあげて戦争するんだ」

「この世界の戦争のように局地戦じゃなく、総力戦が行われる事が多い」

「へえ…それで一回の戦闘に何人ぐらい死ぬの？」

あんまり聞きたくないが

興味があるので聞いてみた

「少ない時こそ1ケタのこともある、ただ多い時は島の守備隊が3万だとしたら

2万9千人以上は死ぬ事もある」

「ヨーロッパでは一回の戦闘に両陣営合わせて10万以上がスターリンググランドだったかでは40万以上が死んだ、負傷者はもつという」

「う…嘘…」

あまりの多さにルイズは言葉を失った

この世界の戦争でその死者の数はおまりにも多すぎるのだ

しかも、その戦いは現代の視点から見れば60年以上も前の話人間は技術が進みすぎたのか、戦争の規模はハルケギニアの戦争よりも

遙かに大きく、死者も多く、運が悪ければ世界規模に発展し悲惨な状況を生み出す

しかし『戦い』とは人間の宿命であり

戦う事によって様々な文明や技術、教訓が生まれた戦争なくして人間は進歩しない

しかし第二次世界大戦はあまりにも悲惨すぎた

「それに、高風さんが言うにはアメリカかっていう、俺の世界の国が10万も20万も一気に命を奪い、町一つを瞬間的に壊滅させる爆弾を投下したらしい」

「被害も甚大だ、それで俺の国は降伏したらしい」

「しかも、それは高風さんの時代から遙か60年以上前の話だ、第二次世界大戦…そうまさしくその戦いだ」

「…せ…戦争は起こるよ…動物だって生き残るために戦うし…」

「でも…いくらなんでもひどいよ…それは…」

あれほど中川に冷たかったルイズ

しかしその言葉を聞いて技術が進みすぎた悲惨さを覚えた

「それで…浩二達はその第二次世界大戦で戦ったの？」

「ああ、前線でな」

「俺は最後、南洋のどこかの島の守備隊に所属していた

そこでアメリカ軍と戦った、そして負けた、俺と数人をのぞく味方全員が死んだ」

「えっ？」

「俺はずっと飛行機乗ってたけど、もう同期の奴なんて殆ど残っていないさ

みんな撃墜されて死んでしまった、いやあ今生きてるのが奇跡みたいだぜ」

「そう…大変だったのね…」

「まあ…」

「こちらです」

将校は扉をあけた、そこは操縦室だ
偉そうな軍人が立っていた

「君達が日本の軍人かね？」

「はい！西澤広義です！」

「中川浩二です、こちらは仲間のルイズであります！」

とりあえず仲間ということにしておいた

ご主人様なんて恥ずかしくていえない

「そうか、私は大和の艦長、有賀幸作、階級は大佐です」

「第二艦隊司令長官、伊藤整一、階級は中将です」

二人とも戦死前の階級で自己紹介した

彼らは死んでいない

そしてここまで誘導した将校も自己紹介をした

「紹介が送れましたね、この場を借りてご紹介します

自分は石田と申します」

石田：伊藤整一司令長官の副官である石田少佐だ

彼を含むお偉いさん二人に中川は聞いた

大和は沈んだと春奈から聞いたので

事情を説明した所突然霧が発生、損傷を受ける事無くきがついたらここにいたという

「まったく、燃料はあまりありませんわ、困ったものですね」

そこで中川にはまた考えが頭を過ぎる

大和とその乗組員を義勇軍に編入すればよいのではと？

確かにかなりのコストはかかるだろう

しかしこれ一隻あればハルケギニアの海は征したも同然、これ一隻あれば

万が一他国の軍隊と戦争があっても海戦で勝利を収めることが可能だ

それに水上機つきときた

これを利用しないわけにはいかない

それに燃料はコルベール先生が複製しすぎて

腐るほどある、満タンで16ノットで7、200海里（13、334キロ）航海できる

しかも世界最大の軍艦を手に入ればそれだけでトリステインに攻めてこようとすると

軍隊はなくなるかもしれない

中川は交渉に出た

「あの…我々は大日本義勇軍という、ほとんどがこの世界に迷い込んだ
んだ

帝國軍人の軍隊です」

「ほう…つまり日本精神を受け継いだ軍隊ですと？」

「はい」

「しかし、まだ規模は小さく、陸軍や航空隊はあるのですが海軍がありません、

そこで大和と乗組員の皆さんを編入したいと思いました

燃料や基地の提供もしますし貴族に頼んで固定化の魔法をかけさ

せませす

維持費の弾もこちらの負担です、給料も支払います」

「どうですか？」

「うーん、長官どうされますか？」

「いや、ここは艦長である有賀大佐が決めたまえ」

「燃料も手に入って、基地も提供すると、一石二鳥ではありませんか？」

「うむ…たしかにそうだ」

「よし、その案に乗ってやりましょう」

「ありがとうございます！」

アルビオン侵攻までまだ2ヶ月期間がある

大和が手に入ってから一ヶ月が経った、兵舎も出来

固定化の魔法もかけ、大和は義勇軍の旗艦（といってもこれしか船はない）になった

ちなみに戦争の話をしてからルイズの態度が

さらに変わったという

10 鉄の島（後書き）

ご意見、ご感想などがいましたらお気軽にどうぞ

11 アンリエッタ行幸

アルビオン侵攻まで一ヶ月に迫ったある日

本日この基地にアンリエッタ女王が行幸するらしい
しかもその日に備えてなにか変な建物が建った

なんなんだろうか？

ラ・ロシエールの失業者もだいぶ減った

それは義勇軍が使える人をとことん雇ったからである

今回アンリエッタを歓迎すべく失業者の中の音楽が得意な人たちで
編成された『義勇軍音楽隊』は特訓を行っていた

披露する曲は『陸軍分列行進曲』

理由は簡単、新たに作曲するのがめんどくさかったからである

ちなみに同音楽隊は今までなかったトリステイン国歌を作成した

…実は歌詞を変えただけでメロディーは愛国行進曲だが

音楽隊は国や軍に頼まれれば曲を作曲する

まあ軍歌などについては日本のものを多少改造したものを提供する
予定だが

理由は新規作曲がめんどくさいからである

またこの日に向けて沢山の旗が造られた

トリステインの紋章、陸軍の軍旗、海軍の軍艦旗

そして日本の国旗の日の丸だ

そして、いよいよアンリエッタ女王が来るとき

「決して、失礼のないように」

「はい！」

「馬車がきました！」

「ようし！道を開ける！」

観客席は満員だ

すこしでも女王になったアンリエッタを目でみようと地元民やほかの町からきた

人まで沢山だ

このおかげでラ・ロシエールは少し潤ったのは秘密だ

特別席にはルイズ、使い魔として中川、そして軍の総司令官である

山下大将が座っていた

ルイズが特別席の理由はアンリエッタと親友だからということ

ヴァリエール家のお嬢様という簡単なものだ、それは裏です、表ではタルブの功ということ

ことになっている

コルベールが開発した、零戦にあった無線をあちこち改造して造られた

スピーカーで放送が行われた

ちなみに声は春奈、こういうのは女性がやったほうがいいという会議でかつてに

決まったのが発端だがそれも明かされず、裏なんです

「アンリエッタ女王が入場いたします」

「プリヤパアレニヨ！」

プリヤパアレニヨとはトリスティン語で準備だ
ドコの言語も参考にはしていないニヨのせいでイタリア語に聞こえる人が義勇軍内にいたらしい

指揮者はラ・ロシエール出身の音楽家である

アンリエッタ女王の馬車と銃士隊が入場する

そんな中、力強く演奏される陸軍分列行進曲
銃士隊は女性だけの隊だが、曲に合わせて行進した
もちろん陸軍式の行進でない為、日本人の目から見たらちょっと違和感はあるが

その後、銃士隊が中央広場に整列、アンリエッタが挨拶を行った

「このたびは私の行幸の為に、全国からこれほどお集まり
いただき本当にありがとうございます、この場を借りてお礼申
上げます」

「さて、ここの基地に本部が駐屯するこの大日本義勇軍はトリスティンの為に

一カ月後のアルビオン侵攻に協力してくれます、今回私が行幸したのも

一カ月後に迫る戦いに勝利の願いを込めてのことです」

「みなさん、この義勇軍を、そして国の軍隊を応援してください
そしてアルビオンに勝ち平和を取り戻しましょう」

アンリエッタが演説した後に銃士隊隊長アニエスが台に登り
演説した

「アルビオンに宣戦布告されて二ヶ月近くが経つでしょう
しかしこっちは義勇軍がいます！そして皆さんの信頼する
アンリエッタ女王もいます！全力で戦いましょう！」
「女王陛下…万歳！！」

「万歳！！ 万歳！！ 万歳！！」

その時、音楽隊がトリステイン国歌を演奏し始めた

全員が起立した

演奏だけだが、元の曲が愛国行進曲である為、それはそれはかつこ
よかった

ちなみにこの国歌の2番は、愛国行進曲とほとんど変わらない

起て一系の^{おおきみ}大君を

光と永久に頂きて

国民我等皆共に

御^{みいつ}稜威に副はむ大使命

往^{はっこう}け八紘^{いえ}を宇となし

四海の人を導きて

正しき平和打ち立てむ

理想は花と咲^{かお}き薫る

臣民の所が国民になっっているだけである

まあそれはおいといて国歌の演奏が終わった

その後、様々な式典が行われた

戦闘機によるアクロバット飛行

戦車や火炮で実弾を放ちダミーに射撃するイベント

さらに特別に輸送機に乗せるなど基地祭のような感覚で物事は進んでいった

その後 -

軍令部 -

「おひさしぶりです、アンリエッタ女王様」

「こちらこそ、山下様」

「実は、軍拡をされてらっしゃる貴方にすごい情報を提供したいなと思ひまして

その為もあつてこんかい行幸しました」

「そ…そうなのですか？」

そんな事の為に行幸するとはすごい女王だなと山下は思った

「そ…それで…どんな情報ですか？」

「実は、ゲルマニアの隣にある冬将軍で有名なモスクワ大公国に

軍事博物館というものがありまして、そこには義勇軍がもっているよ

場違いな工芸品がいくつも展示されているとのことだ。」

「な…なんですと!?!」

「まさかそのモスクワ大公国はその兵器で軍隊を組織しているのですか!?!」

「いえ、使い方は知らないようで、ただ謎の産物として保存してあるだけです」

「な…なんだ…」

「っでそれをどうすれば?」

「使い方がわからないのでいろいろ場違いな工芸品を格安で売り出すようです」

「価格は?」

「一つ8000エキュー、Tなんだかって奴は12000エキューだそうです」

「…はい?」

「ですから、一つ8000エキュー、震なんだかって奴は12000エキューです」

山下が思った事はただ一つ

高い、高すぎる

「大丈夫です、援助金を100000万エキユーあげますんで」

「えっ？国は大丈夫なのですか？」

「大丈夫ですよ全然、毎年余分な金は300000エキユーありますから」

その金を失業者問題に使えと山下は思った

そして、同時にこの国はいつか滅びると思った

まあその時はその時で別にしったこっちゃないが

「…というわけで、私も決戦へ向けて軍拡を手伝います」

「がんばってくださいね」

「は…はあ…」

こうしてトリステインから援助金を貰って

モスクワの軍事博物館まで行って安売り(?)している兵器を買って来い

との事だ、この事は早速海軍に知らされた

11 アンリエッタ行幸（後書き）

ご意見、ご感想などがいましたらお気軽にどうぞ
さあて次回はラバウルの魔王こと西澤広義と
大空のサムライが対決します

12 ラバウルの魔王 vs 大空のサムライ

2日後 -

「...ということ、モスクワまで行って兵器を購入、帰還するという事だ」

「はい！」

エリートの人たちは義勇海軍としては初仕事、勢いよく準備を始めた

午後 -

「出航許可を」

「出航許可を下す」

この日、王立音楽隊が

ダングルテール基地へ集結

軍艦行進曲を演奏し大和の出航を見送った

ちなみに興味があるのでアンリエッタもついていった

1人じゃ危険ということでアニエスやルイズもついていった
ルイズは無理やり中川を連れて行った

その後、大和は順調に航海し着々と

モスクワの港へ近づいていた

この世界のモスクワはどうやら港町らしい

しかし事件は起こった、

到着予定日・

「提督、監視より、竜か飛行機、一つ飛来です」

「なんだ？こちらにか？」

「はい」

「一機だけカタパルトに二式水戦があつたはずだ、
もしものためだ、誰か操縦してくれ」

「はっ！それでしたらよい人物が！」

石田がつれて来たのはなんと、ラ・ロシエールの基地にいるはずの
西澤広義だ

「ロクな飛行機乗りがないと聞いて、もしもの為に
ついてきてくださいと頼まれたのでやってまいりました」

「確か君はラバウルの魔王と恐れられていた優秀なパイロットです
な？」

「はい！優秀だとは思ってませんが！戦闘機に乗せればどんな機体
でも

墜とされない自身があります！」

「そうか、頼りある、二式水戦を知っているか？」

「はい！元は零戦！航続距離やスピードは落ちたものの運動性能は零戦譲りの非常に優れた水上機ですね！」

「そうです」

「それなら、大丈夫です、運動性能がよけりゃスピードなんて気にはしません！」

「そうか、君がいてよかった」

その後、西澤は1人、飛行服を来てカタパルトに立つ
中川が話かけてきた

「ん？西澤？どこに？」

「あ、こちらになにか近づいている模様でして、警戒飛行です」

「そうですか、まあ我々に出番はなさそうですし、適当にがんばってくださいや」

「はい！」

「西澤飛曹長！準備が完了しました！」

「おう！それじゃあな」

西澤は中川らにじゃあなと言って

二式水戦こと二式水上戦闘機に乗り込んだ

二式水上戦闘機は中島飛行機が開発、製造し日本海軍が使用した水上戦闘機である

欧米諸国もワイルドキャットやスピットファイア、メッサーシュミットの

水上戦闘機型を試作したが、重い双フロート式であったこともあり性能的に

不十分だったため試作のみで終わっている

だがこの二式水戦は零戦を元に作られ見事に成功、零戦より航続距離やスピードが落ちたものの運動性能は零戦そのものの、

高性能水上戦闘機が完成した

爆撃機や偵察機の迎撃、さらに防空や護衛などの任務に就き活躍したグラマンを撃墜したという記録も残っている

結局終戦まで使われた、日本海軍の名機であろう

この二式水戦はめずらしく緒戦時の塗装のまま機体全面明灰白色である

「この塗装は…気合入るぜ」

「回します!」

「回せ!」

整備兵はエナジーシャを回す

これが手動だからめんどくさい

「離れる！」

エナーシャが十分に回り

整備兵がプロペラの近くにいないことを確認して

西澤はエンジンを始動させた

「コンターツク！」

コンタクトが訛った日本海軍独特の掛け声と共に、エンジンの始動ボタンを押した

ババ…バババ…

エンジンの調子はよさそうだ

西澤機は発艦を始めた

こうして、警戒の為西澤搭乗の二式水戦はカタパルトから発艦した

「アンタの世界ってホントにすごいよね…」

「まあ、あれの場合パイロットの腕も実力に入るが…」

「西澤はラバウルの魔王って恐れられていたらしいし、万が一
空中戦になっても大丈夫だろう」

もし、空中戦になったとしても西澤なら
なんとかなる、皆そう思った

その頃、西澤

「ふう…久々の海の上の飛行もいいもんだ」

その時、

なにか光が見えた

「！！！」

相手が機銃を放ってきたらしい

「あ、あいつやってきたぞ！」

「ようし…そっちがその気なら！戦闘機に乗ってる時の俺は無敵だ
という所を

見せてやる！」

そういつて、西澤は右に急旋回した

その時、敵機とすれ違った

（えっ！？）

まちがいなく…機種がわかった

（零戦…二一型…）

なぜか襲ってきたのは零戦二一型だ
塗装的に味方だと思はずだ

なぜ襲ってきたのだろうか？

誤認という可能性もある

西澤はとりあえず宙返りを

零戦の後ろにつくことにした

襲われている以上戦わなければならない
さもなければこっちがやられる

半分宙返りしたところで零戦が左旋回をしている所が見えた
その時西澤が思ったことはただひとつ

(うまい…)

零戦のパイロットはベテラン…いやそれいじょうだとわかった
西澤は機体をくるっと回転させ左に急旋回、そりを続けているうちに
零戦の後ろにつく

「く…く…く…」

歯をくいしばる勢い

流石に水上機で普通の戦闘機を相手するのは難しい
いやも西澤の場合腕でカバーできる

だが今回の相手はそれすら難しい相手だ

西澤は機銃のレバーを引く

ダダダ…

しかしすべて外れた

奇妙な飛行をする零戦に西澤は驚く

はっとときがついた時には後ろにいた

後ろから弾が飛んでくる

(まずい!?)

この場合、降下も上昇も危険である、旋回もだ
そこで西澤は敵をだますように飛行
右旋回とみせかけて左に急旋回をした
しかし零戦は騙されない

とうとう完全に追尾されてしまった

(くそ…このままでは…!!)

しかし零戦は撃つてこない
その時零戦と二式水戦が並んだ

始めてお互いの顔を見る

「」

「」

(あ…あいつ…)

(に…西澤?)

(さ…坂井?)

見覚えのある男らしい

その男は手を振る、ついてこいという

西澤は無線で連絡、大和の近くなので無線も有効だ

「相手は零戦、多分味方です」

大和 -

「なに？ そうか、わかった」

「艦長、すぐに港へ、別な水上機を行かせましょう」

「了解した」

「トリーカージ！」

大和は急に動き出す
モスクワの港目掛けて

一方西澤は

「…坂井…坂井さんじゃないですか」

「嘘だろ？お前西澤じゃないか？」

感動の再会である

坂井…そう坂井三郎だ

坂井と西澤は台南空で大田とともに『台南空の三羽鳥』と呼ばれる
実力をもっていた

「あれはまぎれもない、1942年8月7日

ワイルドキャットの編隊と誤認してドーントレスの編隊に突っ込んじまった」

「その結果、重傷を負ったが帰り道、意識が薄れてく中、気がついたらこのへんの

上空にいて、地元民の協力で助かった」

「まあ右目の視力はほとんどなくなっちまったがな」

「燃料もあまりないけどでっかい軍艦が現れたから

見に行ってみたら迎撃にきたと思いきや空中戦になっちまったってわけだ」

「あれはすまなかった、俺の誤認だ」

「そうですね…」

その時、エンジン音が聞こえた

「ん？おお！味方だ」

「味方？」

「事情は後で説明します」

上官である坂井に敬語で話す西澤

しかしうれしかった、ガダルカナル戦までの戦友と再会できて

それと己の腕の限界を知った

120機を撃墜したからと調子に乗ってたらこの様だ、

坂井に撃墜されそうになった

やはり大空のサムライ、坂井三郎には勝てないと改めて思った

降りてきたのは水上機乗りの草加少佐と高見沢中尉だ

坂井と西澤の二人に敬礼する

事情を説明した

その後二式水戦は大和の近くまで飛行、カタパルトへ戻った

坂井は自家製格納庫に零戦を閉まった

どうやらモスクワの佐々木武雄みたいな存在になりかけていたらしい

この時、始めて中川は坂井と出会った

「ちようどいい、この人に案内してもらおう」

坂井三郎はモスクワを案内することになった

12 ラバウルの魔王vs大空のサムライ(後書き)

ご意見、ご感想などがいましたらお気軽にどうぞ

次回、軍事博物館にて沢山の兵器と

ソ連と日本の有名な軍人が登場します

13・モスクワ軍事博物館

「ここです、モスクワ国営『モスクワ軍事博物館』です」

坂井は笑顔で案内した

この男、写真では笑顔でいることが多い

「わあ、姫様がいった博物館って…いがいとボロいね」

ルイズがボロいというのも仕方ない

使い方がわからない地球の場違いな工芸品が多数おいてあるが
国事態財政難でしかも観覧にくる人がいない

それなら場違いな工芸品を売ろうという結論に達したほどだからだ

満洲の丘にというロシアの歌が似合いそうな雰囲気だ

本当にお金がないんだなモスクワ大公園…

「うげ…ハルケギニア語…」

「ルイズ、これ読めるか？」

「うん、と、」

そこにあるものは塗装から日本軍の飛行機だとはわかった
しかし機種がわからん

ルイズが読むにこの飛行機の名前は『陣風』というらしい

「こいつあ、俺たちもみたことないですなあ」

「零戦の後続機ですかね？」

西澤と坂井も見覚えがない

じゃあ陸軍機なのかと義勇兵たちは思った

「海軍つてかいてありますね」

アンリエッタがさらっとよんだ

説明によれば日本海軍の試作戦闘機らしい

ちなみに日本の航空機は何機があった

その中でも最も多いのが陸軍、九一式戦闘機、

旧式ではあるが当時としてはかなり高性能な部類である

「なんでわかるのよ？モスクワには場違いな工芸品の使い方してる人いないって

いってたじゃん」

「俺に聞くな…」

「でも、本当にこれよくできてますね」

「そうですな」

「うわっ！ コルベール先生!？」

アンリエッタに同情するように

言ったのはいるはずもない、コルベールだ

「先生！なんでここにいますか!？」

「いやあ…おもしろそうだったんでついてきてしまいましたよ」

「いやっ　しかしこれは本当によくできた代物ですな！」

「やや、こつちにも！…かわった大砲ですな」

「えっ？」

「…これ八八式七糎半野戦高射砲じゃないですか」

「ルイズ、これすごい竜だね」

「えっ？姫様どれですか？」

「…なにこれ！？　変な形！」

「色的に海軍機だが…こんな奇妙は飛行機は見た事ないですな」

「それはJ7W1震電ですよ」

「し…しんでん？」

「あ…アンタだれなのよ？」

「俺か…」

あまり元気なさそうなこの男
服装はなぜかソ連軍将校の軍服だ

「アンタ達…日本人か？」

「わかるんですか？」

「ああ、手合わせしたことあるからな」

「貴方の名前は？」

「紹介が遅れましたね、私はゲオルギー・ジューコフ、モスクワ軍
事博物館の館長です…

「つていうよりも皆さんの場合赤軍元帥といったほうが早いでしょう
うか」

「有賀大佐、この人つてまさか？」

「まちがいないですけど、ノモンハン事件のソ連の指揮官です」

ゲオルギー・ジューコフ

おそらくソ連軍人で最も知られる軍人だろう

そう、かのノモンハン事件でソ連軍を指揮

独ソ戦などでも大活躍し赤軍を勝利へ導いた男だ

ソ連は北海道も占領する予定だったがモトロフと共に彼は反対し北
海道は占領されなかった

1974年、死亡したが軍人として最高の栄誉をもって葬られた

「いやあ、スターリンに粛清されてしまいました」

「どうやら平行世界のソ連からきたらしい」

「彼の世界ではスターリンはジューコフを粛清したそうだ」

「でも気がついたらここにいて、異世界人だつてもてはやされてこの博物館の前館長より頼まれ私が館長に就任、現在に至る」

「はいいいんですが…とにかく金がなくて…」

博物館も誰も見にこないのも利益がなくて国営ということもあり廃館命令が下されるわ

…それで廃館までの一ヶ月間、場違いな工芸品、つまり兵器の投売りセールを始めた

わけですが、なんせこの世界は軍隊も使い方がわからないように、いや、産業革命時ぐらいの技術や工業力はあるのですが

このように高度な武器の使い方は知らないらしく…

すごいというだけで価値はないと思われて…」

「結局誰も買ってくれないのです…」

ジューコフさん、お気の毒です

「ああ…このままでは私の生活が!!」

一時期の栄光はどこへ!?もう赤軍でもどこでもいいから

もう一度職業軍人として働きたい!」

なんでも軍人として現役復帰したいらしい

しかしソ連は敵国、簡単に受け入れるのは危険では?と思っただがアメリカ人もいるしジューコフは本当に困っているみたいなので救いを手をささげた

「あの…我々は大日本義勇軍という軍隊なのですが」

「え?」

「どうですか？司令官が許可をくだされば指揮官としてなら活躍できますよ？」

「ほ…本当ですかい！？」

「でも…兵器どうしよ」

「我々はその為にやってまいりました」

「へ？」

「来たるべき決戦に備え軍拡中なので大丈夫です、日本人だけではないので」

「本当かね！？でもお金は？」

「はい」

アンリエッタが持ってきた
有り金全部を渡した

「す…すごい…なぜこれほどのお金を？」

「私の国の余分なお金の一部です」

「…すごい…まったくもってすごすぎる…」

「…いいや金は」

「はい？」

「金なんていらない、軍人として働けるだけで私は幸せです」

「この館内にある兵器全部もって行ってよいですよ！」

「ええええ!?!」

その言葉に一同は驚く

だがかなりの数がある展示品、これをすべて輸送するのは不可能である

「なに?輸送が困難?」

「はい…」

「じゃあ、海の博物館にいきますか?」

「海の博物館?」

「ええ、ここのごすぐとなりで、同じくあとわずかで廃館に…」

「アンリエッタ女王、どうされます?」

「無償ですよ?行きましょう!」

こうして一同は海の博物館へ向かった

そこにあつたのは日本戦艦『伊勢』だ

大和とは月とスツポンの差があるが

木造船しかないハルケギニアでは十分すぎる

「これしかないんですがね…固定化の魔法がかかってて

状態は良好です、艦長に頼んで弾薬庫とかからにさせましたから

かなり輸送できますよ」

「やあ、ジューコフ元帥ではありませんか？」

「！？山口多聞中将！？」

一同はおどろいた

戦艦伊勢から降りてきたのはなんと日本海軍の山口多聞中将である

「貴方達日本軍…みたいですね、同じ軍の人がいてよかった」

「まあ私は中将ではなく大佐ですが」

山口はどうやら『伊勢』の艦長時代
という設定らしい

伊勢は今戦闘不能状態だ、輸送の為に弾薬をつんでないという
まあ大和一隻あればなんかあっても大丈夫だろう
それにジューコフ曰く今なら整備員や技師までつくという

「丁度よいですね、コルベール先生の願いがかないますよ」

「願い？」

「やあ、私は弾だけじゃなくて生産はできなくともせめて整備工場
ぐらい

あつたほうがよいかたと、メイジを結構あつめたのですがまだた
りなくて、

ホントモスクワにきてよかったですよ」

こうして、分解しなければ運べない兵器は
整備兵によって丁寧に分解されそれぞれ艦艇に乗せられた

この博物館で手に入れたものは

AK-47、倉庫にあるの含めて30丁

九四式37mm速射砲3門

九一式十糎榴弾砲10門

八八式七糎半野戦高射砲5門

四一式山砲1門

戦艦伊勢

零戦二一型1機

陣風1機

震電1機

九一式戦闘機、3機

il-2、1機

bf-109、2機

零式輸送機2機

仲間になった人 -

坂井三郎

ゲオルギー・ジューコフ

山口多聞

これほど大量の兵器を手に入れ
航空隊の飛行機不足はだいぶ補われたが
逆に陸軍は兵員が不足する事態に陥った

特に砲が何十門もあるのに撃てる人がほとんどいないなど
とにかく深刻な状態だ

海軍は戦艦が二隻になったが
維持費が高そうである

この兵員不足さえ解消できれば
数では劣るが装備品のおかげもありアルビオン軍とまともにやりあ
えると国は予想している

13・モスクワ軍事博物館（後書き）

満州の丘に立ちてというロシアの曲があります
これは日露戦争終結後に作曲されたものです。

日露戦争時満州各地で激戦が繰り広げられ
日露両方の兵士が多くが死にました。

作曲者であるシャトロフの所属していた歩兵連隊も
多くの犠牲者が出てその死を悼んで作ったのがこの曲です。

日本にも同様に『戦友』という軍歌があります。
ロシア版『戦友』と言っても過言でしないでしょう。

ちなみに後にベンチャーズがMANCHURIAN BEATとして
演奏した、ご存知の方は多いかもしれませんね。

14 ルイズの父と中川と春奈の謎

戦争開始も3日後に迫ったある日

義勇軍の基地に1人の男がきた

ルイズの部屋に春奈がやってきた

春奈はなんかメイドみたいな活躍をしていた

「ルイズさん、お客様です」

「え？」

思いもよらぬ突然の来客

ルイズの頭には自分の元に来そうな人を何人か思い浮かべたが候補がない

「こちらです」

春奈の声が聞こえた

そして部屋に入ってきた人物は

「えっ！？ お父様！？」

「ルイズ、やはりここにいたか」

「な、なんでお父様が！？」

「まったく、戦争に参加すると言うし、中川という人間を

使い魔にしたとも聞いた、何を考えているのだね？」

「す…すみません…」

「まあ、済んだことだし、咎めてもしかたない」

「それより中川浩二という男をよんでくれないか？」

「えっ？はい…」

ルイズは中川を探した

一方中川は -

「よし！すばやく照準を合わせ！」

「撃ち方始め！」

ダウン！

一個しかない戦車連隊の連隊長として

戦車隊を指揮、今回は実弾を用いた軍事演習だ

3日後に迫る決戦に勝利すべく

またすくない物資を有効活用すべく戦車隊全体の質を上げようとなんばっていた

「命中弾は6両中3両か…」

「連隊長殿！どうでありますか！？」

「ダメだ、アルビオン軍は30万の正規軍に加え国民義勇軍が100万近くいるのだ」

「対するこつちは臨時召集させられた兵士がほとんどのトリステイン軍と」

総勢1000名なんてはるか夢の彼方の弱小義勇軍のみだ」

「トリステイン軍だけなら負ける」

地球の兵器を装備する我が軍が支援しなければならぬ」

「数で勝る軍隊に勝つには、質が必要だ！」

命中率を90パーセントまで上げなければ弾が尽きる！」

「はい！」

「よし、とにかく猛訓練だ、そこから集めた人間どもでさっき編成された」

砲兵隊が心配だがそんな事きにしていない暇はない、やるぞ！」

「目標を用意しろ！」

「はい！」

「浩二？」

「ん？ルイズどうした？」

「ちょっときなさい」

「待ってる、今演習中だ」

本当に数時間待たされた
そして…

「つれてきました、お父様」

「ん？」

そこには、毎回お馴染みドイツ軍将校の軍服に勲章がいつぱいついたやつを

着ている中川がいた

「君が中川浩二かね？」

「はい、大日本義勇軍大佐、戦車連隊長の中川浩二であります！」

「…」

そのとき、ヴァリエール公爵が魔法で攻撃してきた

「！！！」

間一髪で交わすことに成功した

「貴様など私のルイズの使い魔などにふさわしくはない！」

アルビオン侵攻など危険だ！貴様は打ち首だ！」

「お父様やめてください！」

その言葉を聞いて意外に思った

なぜルイズが中川殺害をやめさせようとするのだろうか

出会った時の態度はむしろ死んでくださいというものだった

しかしヴァリエール公爵は娘の口など聞かずに中川を攻撃する

本当に中川を殺すつもりだ

中川の行くところ魔法がくる

ヴァリエール公爵の高威力魔法を食らえば一撃で死んでしまう

「どうした！戦うのならむかってこい！」

たしかにこのままでは殺される

逃げてばかりでは脅威は消えない

そろそろ反抗に移らねば

そう思い近くにかけてあった三八式歩兵銃を手にとる

パン！

パン！

銃声が響く

「！！」

発射速度がハルケギニアの銃にくらべて

速い為ヴァリエール公爵は交わすのに苦労した

「！？」

三八式の弾が尽きた

かえの弾はなさい、腰にかけてある十四年式拳銃を手にとった

「なに！？」

パン！

ヴァリエール公爵を狙い

中川は撃ち続けた

しかし3発うつたなかの3発すべてがかわされた

(…動きは敏捷だ、勝つには…銃は匣にすぎぬ…恩師の軍刀のみ!)

中川は突撃するかのようにヴァリエール公爵の元ほ走っていった

隙が出来たと思いたまたヴァリエール公爵は魔法で攻撃する

しかしそれを巧みに交わし銃を発砲

これがかわすのでヴァリエール公爵の限界だ

ヴァリエール公爵にも隙ができた

今なら恩師の軍刀でブツ刺す事も可能である

中川は勢いよく恩師の軍刀を抜き

西郷切腹のさい別府が叫んだ言葉を叫んだ

「ごめんなったもんし!」

ヴァリエール公爵の頭の中には

今までの人生が一瞬で流れる

もう終わったと思った

「やめてください!」

その言葉を聞いて中川は刀を止めた

そこにいたのは春奈だ

「最初っから見えました…お客様も中川さんもどうかしています!」

中川の目はマジだ

自分の身が危ないのでアドレナリンが前回だった
鋭い目つきでヴァリエール公爵を睨んだ

「貴様：今日は勘弁したる…次は本当に命がないと思え」
刀をしまい

中川はその場を去った

ルイズは父親を心配し
声をかけた

「大丈夫ですか？」

「かまわないでくれ…」

「えっ？」

「お前はよい使い魔をもった…」

「だがなんかあつたら家に帰ってきなさい」

そういつてヴァリエール公爵はその場を去った

「お父様…」

その頃中川・

「すまない…急に襲われたんで…」

「わかります…でも殺すのはいくらなんでも…」

身内（中川）と思われる人物が

殺人を犯す所を見たくなかったのだろうか

「あの…ちょっといくつか質問させてください」

「いいですよ」

「あの…なんて島にいました？」

どうやら本当に自分の身内か調べるために
中川に質問するらしい

「さあ、名前もないが俺たちは紺碧島とよんでいた」

「守備隊の総司令官は誰でした？」

「西元昭雄陸軍大佐です」

西元昭雄とは前作冒頭に名無しだがちよつと
登場したなもなき島、通称『紺碧島』守備隊総司令官
本編では彼の最期は語られてないがアメリカ軍に追い詰められ自決
した

「やっぱり…曾お爺さん！」

春奈には現代日本で手に入れた情報がある、
自分の曾祖父と同じ事をいう中川を自分の曾祖父だと突き止めた

しかし、守備隊は玉砕、遊撃戦を展開しようとした彼は
どうして生き残ったのだろうか？

「私の曾祖父は守備隊が壊滅しても戦い続けましたが戦後の1945年9月15日に、食糧もつき弾もほとんど残っていない状態でしかも戦友は1人餓死

2人でさまよっている所をアメリカ軍に発見され銃撃戦になったって

私の世界の貴方が言っていました、その時は子供でよくわからなかったのですが」

春奈がいつに1945年の9月15日、こんな事があつたらしい

史実の1945年9月15日、名無しの南洋の島、通称『紺碧島』
(もちろん小説内の“史実”であつた現実ではおこつてない話だ)

「…」

「…」

この時生き残っていたのは中川陸軍伍長と田口陸軍上等兵のみであつた

「水…」

「このままじゃ横井のように死んでしまう…」

史実でも戦車を手に入れ使用していたが燃料も弾もなにもかまもがつきしかもアメリカ軍に破壊されてしまったこれまでそこらに転がっていた日本軍の兵器で戦ってきたがそろそろ限界のようだ

「外の情報は入ってこないし…はあ今頃日本はどうなっているんだ？」

「まさか…もうないとかいうのでは？」

「馬鹿！天皇陛下がおられる神の国が滅びるわけない！」

「きつと満州に亡命政権をたててアメリカ軍に反抗する機会を窺っているに違いない！」

「…ですよね！心配することはないですよね！」

「…いや…心配だ…国じゃなくて家族と…彼女が…」

その時、銃声が聞こえた

「！？」

「誰だそこにいるのは！」

「まさかどこかの作業員か！？」

「しまった！アメリカ軍にばれた！」

中川達はアメリカ軍に存在をきがつかれてしまった
銃をもち残りの弾を全部つかって死ぬまで戦う事にした

その後、アメリカ軍20人と日本兵2人の
激しい銃撃戦が始まった

「伏せろ！西へゆくぞ！」

「はい！」

すこしでも長く戦う

戦争は終わったとも知らずに戦い続けた
愛する祖国と家族を守る為に

しかし戦いの途中で田口上等兵が
頭を撃ちぬかれ死亡する

「田口い！！ くそぉ！！！」

はっときがついたらうしろに
アメリカ兵が！

（くそ！もうだめだ！）

弾もない、戦車にあった恩賜の軍刀で
突撃しようとした

しかし

「貴様！！その服装は！？」

ガシッ！

「このジャップめ！戦争は終わった！ちょっとこい！」

中川は抵抗する

アメリカ兵は手刀で中川を気絶させた

目が覚めたら…

「…ん…ん？」

「目が覚めたか、日本人」

「な！」

中川はすごくアメリカ軍を警戒した
聞く話ではアメリカ軍に捕虜にされた日本兵の中では
拷問にあつたり殺され死体をバラバラにされたという話を聞いた

幸い恩賜の軍刀はさげっぱなしだ
アメリカ軍に捕らえられ殺されるぐらいなら自決したほうがマシだ
と思った

数時間後 -

「お茶ぐらいならくれてやるぜ」

「…おい？なにしてる？」

「ん？」

刀をだし軍服のボタンをあけ腹を出していた

「宮城はどちらでありますか？」

宮城…皇居の方向をアメリカ兵に聞いた

「さあな、俺は知らん」

「そんな事より自決など馬鹿な真似はするな」

「確かにお前の事殺したいと思ってる米兵はいっぱいいるが

俺はすくなくともお前の味方だ、必ず本国に戻るよう、協力する」

命を狙われているのは確かだが

この米軍将校のおかげで1946年、日本に帰る事ができた

その後、結婚、1年後の31歳で娘を授かる

22年後には孫ができる

さらにいろいろあつて1990年、74歳の時に曾孫こと高風春奈を授かる

地球世界では2007年（ゲーム発売時の時代という設定）なので現在91歳でギリギリ生きているらしい

よく戦争の話をしてくれたので同い年の人よりも詳しい春奈である

今 -

「なるほど…ってことはお前は本当に俺の曾孫なのか…」

自分が本当なら歩んだ人生…

それは想像もつかない人生だった

「あの…やっぱ…さすがにひいおじいさんってのはダメですよね？」

「まあ…ルイズになに言われるかわからないしな」

「今までどおり中川さんって呼びますけど…
普通に話していいですか？」

「全然かまわないですよ」

「じゃあ、中川さんも普通に話してください
私の事春奈でいいですよ」

「わかった、春奈」

「うん」

二人の関係は一応、血の繋がった者同士ということになった
元々そうだがお互い認めたのはこの時だ

部屋

「ルイズ、さつきはすまなかった」

「いいよ、アンタの事ほめてたよお父様」

「ん？」

「もういいわ、鈍感ね」

「なんかよくわからんが、まあいい、おやすみ」

「はいはいおやすみ」

こつしてやたら長く感じた一日が終わった

14 ルイズの父と中川と春奈の謎（後書き）

ご意見、ご感想などがいましたらお気軽にどうぞ

15・ロサイス攻撃 上

タルブ村でレコン・キスタ軍を打ち負かしてから
幾月経ったことか…

侵攻は目前に迫る、その頃、義勇軍では -

「ジューコフ君、頼めるかね？」

「はい、軍人として戦えるなら、どんな仕事でも！」

ゲオルギー・ジューコフ元帥が

侵攻作戦の大日本義勇軍の指揮官になった

「しかし、問題はどうかやってアルビオンに上陸するかですな」

「戦車や砲はトリステインの艦隊が総力を挙げて輸送してくれると
いうのですが…それにはロサイスという敵の軍港を征しなければ
ならないのです」

ジューコフは悩む

山下もその答えを出すことはできない

相手は浮遊大陸、山下にとっても、ジューコフにとっても始めての
戦場だ

バツ！

「おお？」

その時勢いよく手を挙げたのは
加藤建夫少将、義勇軍では航空隊の司令官だ

「私は、海軍がいつかやった真珠湾攻撃のように
航空機だけで、奇襲を仕掛ければよいと思います！」

「航空機だけで!？」

「はい!たしかに飛行機はあまりありません、しかし士気はありま
す!

我が航空隊に任せてください!」

「60隻ぐらいある敵艦のうち半分を撃破する自信があります!」

「ちょ…: ちよつとアンタなに考えてるのよ!」

ルイズが加藤に突っ込んだ

なぜここにいるかというと彼女も戦争に参加することにした
ただしトリステイン軍だが

明日になったら義勇軍と共に港へ向かうという

「竜だけでアルビオン軍の艦隊を倒せるわけ

ないでしょ! ホントになにかんがえてるの!？」

「しかし、敵は木造船だけです! 爆弾が一発でも命中すれば
たちまち燃え上がり船は終わります!」

「航空隊の全兵力で…: この作戦を決行したいと思います!」

「うん」

「やってみろ」

「山下大将！こんな馬鹿けだ作戦やらせていいんですか！？」

ルイズは不安だった

なんせ霧島少尉は飛行機にのって竜にやられたからである
体当たりしないと倒せないものと思っている

中川も反対側だった

「攻撃はトリステインの艦隊に任せるべきです

我々の本命は陸上戦です」

しかし加藤は反論する

「しかし、艦隊の中には輸送船もある、それが撃墜されてしまったら
戦車も砲もすべてなくなります！」

渋々、奇襲作戦は航空隊に任せる事にした
そして2日後：ついに開戦の時だ

戦闘機や攻撃機、輸送機にまで爆弾をぶらさげたりつんだりした

「じゃあ、ムリはしないでくださいよ」

コルベールが心配そうに航空隊の皆に言った

「わかっていますよ」

「坂井さん、坂井さんも参加されるのですか？」

「ああ、西澤、墜とされるなよ」

「心配ありません！」

「まあ、お前も相当の腕前だ、俺の上いってるかも
しれないってレベルだしな」

「はい」

「回せー！！」

一斉にパイロット達は飛行機に乗り込む

航空隊の全兵力を使った大規模な奇襲作戦が始まった

バババ…

次々と荒鷲達が離陸してゆく

アルビオン大陸へ向けて…

それを見送るルイズの心境は複雑だ

絶対失敗すると思っているのだ

加藤隊長の隼を先頭に零戦2機、ヘルキャット1機、陣風1機、震
電1機

九一戦1機 bf-109 1機 il-2 1機 零式輸送機2
機の編隊だ

アルビオンの航空兵力は竜なので

迎撃にあがられてもさほど脅威ではない

ただし九一式戦闘機はちよつとあぶない

最高速度320キロの九一戦に対し火竜の最高速度は110、これなら勝てるが

風竜は300キロ、微妙に劣る程度なので乗っている人ががんばれば撃墜できる飛行機であつた

操縦士以外はすべてトリステインからの志願兵

猛訓練の末ようやく実戦で使えるレベルになつた

その訓練とは『トラ！トラ！トラ！』のように地図を使い遊び感覚でだ、これは大変効果がある

ロサイス軍港

「おっ？」

「どうした？」

「かわつた音がするな」

「変わった音？」

聞きなれないその音

「あれ…なんか飛んでるぞ？」

「竜じゃないのか？」

「全員集合！」

「おっ 国歌演奏か」

「いかなければな」

アルビオン兵は

国旗を揚げ国歌を演奏する

誇り高き空軍は毎朝、これが礼儀なのである

一方、義勇軍航空隊は既にアルビオンの上空にいた

陸軍も海軍もほかの国のひとも関係なしに真珠湾の真似をやるほど
余裕があった

「トトトト…」

この日の為に陸軍軍人なのに加藤は言った
わざわざ練習したのだ

「トラ！トラ！トラヤ！我奇襲ニ成功セリ！」

一方、司令部

「やったあ！！」

「おい！加藤の航空隊が奇襲に成功したみたいだ！」

「ツハハ！！！」

「う…うそ…あっさり成功したの…？」

「らしいな」

「し…信じられない…！」

ルイズは今までの常識と照らし合わせた、信じられないのである
竜だけで奇襲に成功したのが

航空隊

「よおし…みんな思う存分暴れる！」

「はい！」

加藤隊と坂井隊の二グループに別れ編隊飛行をした

軍港には何十隻にもものぼる

アルビオンの艦艇が並んでいた

これと真っ向勝負すれば流石の義勇軍も勝ち目はないだろう
だからこそ『奇襲攻撃』である

まず加藤隊のうち九一戦が機銃掃射をした

ダダダ…

木造の小さな建物はこれで破壊されてしまう

一方アルビオン軍は逃げ始めた

「ぎゃあああー!!」

「ここから撤退しろ!!!総員配置につけ!!!」

まず巡洋艦クラスの船に加藤が爆撃

爆弾は見事命中、一発しか落さなかったが
木造船なので問題なし

「おい！ なにが!？」

「さあ…敵の竜が…」

「早くしろ！全艦出撃！

それと竜騎士隊を迎撃に出せ！」

「わかりました！」

アルビオン軍にも情報が渡った

これは訓練ではない、実際の戦争だと

攻撃開始15分が経過した、この時10隻近くを撃破した

零式輸送機 -

「よし…今だ！投下！」

「投下！」

爆弾を一発投下しそれは見事アルビオン戦艦の艦橋に命中した

「やったあ！命中した！」

ドオン！

「なんだ！？」

「どうやら敵も撃ってきたみたいですね」

大砲を上に向けて輸送機に撃ってきた

いくら中世レベルの大砲でも飛行機に当たれば

戦車とは話は別、大破し火を噴いて墜落してしまう

一方坂井隊は爆弾を投下、8隻の撃破に成功後制空権確保の邪魔になる竜騎士隊の殲滅に行った

「なんとかしてでも敵の竜をすべて迎撃するぞ！」

しかし坂井三郎や西澤広義の前に

竜は次々と撃墜されていった

竜騎士ロサイス方面軍司令部

「うぬぬ…しかたない、あいつらを呼んでこい」

「わかりました」

数分後 -

「司令官、つれてまいりました」

竜騎士隊の切り札とは？

15・ロサイス攻撃 上（後書き）

ご意見、ご感想などがいましたらお気軽にどうぞ

航空隊は陸軍と海軍の伝統がごっちゃになっ
ているのであんまり気にしないでください

16・ロサイス攻撃 下

竜騎士ロサイス方面軍司令部 -

「お前たちが操る二匹の力で…
敵の竜をすべて迎撃されたし」

「はい！」

そう答えた二人組み
物凄くキリッとした面構えで
真剣な目だった

「回せ！」

・
・
・

バババ…

手で合図をし

アルビオン竜騎士隊の切り札たる竜乗り達が出撃する、しかしこの竜、生き物ではなかった

その頃、坂井隊は -

機銃掃射をしていた、ここいらは全部軍の宿泊施設である

イエーガーの掃射が終わると坂井は合図をした

時間なので帰投すると

坂井、西澤、仲本、イエーガーらは
編隊を組み帰投しようとした

地上 -

「くそお…トリステインめ！」

その時、アルビオン兵士達の上を
二つの変な音が通り過ぎた

「ん…おお！味方の竜だ！がんばれ！」

坂井達よりも高度をうえに、

竜は後ろから奇襲を仕掛けようとした

二人はゴーグルをかける

ダダダ…

イエーガーの機体はヘルキャット、無線機の性能はいい
全機に連絡した

「撃たれた」

…というよりほかの機体もアメリカ軍の無線を
複製したものを使用している為無線で会話ができた

「なに！？」

みんな信じられない

飛行機にのっているのは自分たち以外いるはずがないのだ

イエーガーは無線で喋り続ける

「敵は2機、疾風だ」
フランク

「フランク？」

みなその飛行機をしらない

しかし西澤はしっていた

「わかったぞ、俺もあんまり詳しくはないが

それは多分、陸軍の四式戦闘機です！」

「四式？」

「大東亜決戦機って期待されている事以外は知りません！」

「なんでここに陸軍の戦闘機が…まあいい」

「イエーガー少尉、大丈夫でありますか？」

ちなみに坂井も少尉に昇進した

西澤の要望である

「戦闘は不可能だ、離脱を要請する」

「許可します」

「仲本も護衛を頼む」

「えっ？」

「空中戦は俺と西澤に任せろ」

「わかりました」

仲本とイエーガーは離脱

坂井と西澤が零戦で、あの陸軍の大東亜決戦機、
四式戦闘機こと『疾風』に勝負を挑んだ

「撃つてきました！」

「被弾は？」

「ありません」

「俺は左へ、西澤は右へ旋回しろ」

「はい！」

二機は旋回する零戦を追う

そのうち坂井を追尾する一機が照準を合わせ機銃を撃った

しかし坂井もトップエースレベルの技量を持つ
ベテランパイロット

左捻り込みなどの必殺技で回避しそして…

(よし…！！)

坂井は20ミリ機銃を嫌い

7・7ミリでほとんどの機を撃墜したという記録がある
彼はその通り、7・7ミリで機銃を撃った

ダダダ…

疾風には数発命中したが
ほかの日本機にくらべ被弾に強い事で有名なこの機は7・7ミリが
尾翼に数発命中
したのみでは撃墜できない

だましうちをするかのように左へ旋回
だがこれが間違이었다

零戦は左旋回が非常に得意な機である
こうなると、坂井より下手なパイロットが乗っている疾風は
餌食同然、坂井三郎は7・7ミリ機銃を集中的に放つ
そして疾風は火を噴いた

敵についていたとしても、相手は陸軍でも、同じ日本軍
さすがにちょっと気まずかったという

疾風に向かって敬礼をした

一方西澤も激しい空中戦を展開していた
西澤が相手をしたのはどうやらベテランのほうらしい
機体の性能の差もあり手ごたえを感じた

(こいつ…できるな)

(だが坂井さんほどではない…)

(…もしかして零戦よりも高性能なのか？あの戦闘機は？)

真後ろにつけた
照準も丁度あう

(すまん！)

7・7ミリと20ミリを同時撃ち
疾風はバラバラになって地上に落ちていった

(本当にすまん…)

元は同じ日本兵だけに罪悪感を感じた
西澤も敬礼した

ロサイス奇襲は成功、また爆弾をつけ出撃した
第二次攻撃隊と合わせて50隻近くを撃破することに成功した

すべて爆弾で撃破したわけではなく
弾薬庫に引火して爆発し周囲の船体に引火しさらにその船の弾薬庫
に引火、爆発が
続き多くの艦艇を撃破、残りの船もなんらかの損傷があった

だが…

夜 -

「なに！？陸軍の戦闘機が!?!」

「はい」

「…なんということだ…」

「これまで我が軍以外まともに運用できる者はいないと思っていた

のだが……」

「警戒しなければならぬ……」

疾風二機がアルビオン軍として迎撃

として上がったのは義勇軍にとってそうとうなショックだった

戦いを優位に進めるのは困難になるかもしれないという予想もでた

16・ロサイス攻撃 下（後書き）

ご意見、ご感想などがいましたらお気軽にどうぞ
今回アルビオン側で登場した疾風は坂井と西澤に
敗れましたが実際の疾風は一時的に中国やレイテ湾の
制空権確保に成功したり、飛行第85戦隊と飛行第25戦隊がP
51相手に善戦したりと、登場はおそかったの
ですがそこそこ活躍したそうです。

17・アルビオン上陸

ロサイスを奇襲したことにより
攻めてこられる心配がなくなった

アルビオンに勝つにはあとは上陸し陸上戦
を行うのみである

しかし…

ラ・ロシエールの港 -

メイジ達が苦勞し

チハ5両、八号1両、その他砲19門を船に乗せた
アルビオン侵攻参加者は日本義勇兵とトリステイン兵合わせて約2
万である

だが急に編成された為に士官が不足するという事態に陥った

アルビオンへ向かって空中船数十隻が
出航した

「どうしたの？ あんたにしては元気ないわね」

ルイズが中川にきく

「戦争に行くんだ、浮かれてられるか」

「…そうよね…特に浩二の世界の戦争は…」

まだあの話が頭に残っている

中川の世界の戦争の規模の大きさと悲惨さがしっかりとルイズの頭に…

「中川連隊長！」

「ん？ 田口か」

「…ってシエスタさんまで何故ここに？」

「なんでって！私戦車兵ですよ？」

「えっ？ でもシエスタさんはいませんでしたよ」

「…もしかして私の戦車は1人兵員が足りませんでしたか…まさか…」

「こっそり光雄と訓練しました！」

「み…光雄って…」

呼び捨てかよ

「どうしてもシエスタと一緒に戦いたいというもんで

自分が射撃の訓練をしました」

シエスタって呼び捨てかよ…

しかも田口がいままで射撃手だったのに

今回はシエスタが射撃手だという

折角命中率を85パーセントまで上げたが

これでは70パーセントになってしまおうのではないかと中川は恐れた

「それがこの娘結構筋がありまして、命中率が半端じゃなく高いのですよ」

「そ…そうなのか？」

頼れるんだか頼れないんだかよくわからない

しかもシエスタの服装は
義勇軍の正式のものでもある日本軍戦車兵の軍服だ

数十分が経過した

ただの学院のメイドだったシエスタが連隊長搭乗の戦車兵だと知って中川は失望した

もうだめだとすら思った

港につき、いざ上陸開始だ

「上陸開始！」

「上陸を開始する」

この日の為だけに

造られたトリスティン軍の揚陸艦「ヨークタウン」

なんの間違いかアメリカ軍の空母と同じ名前である

もちろんほかの艦艇同様木造である

誰が伝えたのか突撃ラツパが演奏された
こんなところまで学院の器楽隊をつれてくるなんて
トリスティン恐るべし

しかし突撃ラツパのおかげか
義勇兵の士気が高まる
彼らは元々日本兵であるからだ

先に両軍の歩兵が降りる
その後、歩兵は警戒、戦車や高性能火砲などを降ろした後、トリス
ティン軍の
中世レベルの火砲を降ろした

ここまででアルビオン軍の攻撃はなかった

「浩二」

「なんだ？」

「死んだりしたら許さないんだからね！」
「使い魔がいなくなっちゃって馬鹿にされるし」

「お前のほうが戦死する確率高いだろ、装備品的な意味で」

「うるさいわねー！」

「義勇軍！全員集合！」

ジューコフ元帥が大声をあげる

「それでは、ご主人様」

「うっ…またね」

しかしルイズつたら

本当にあれから態度が変わったな90度から120度になった感じだ

戦車連隊は右側に

歩兵連隊は中央に

砲兵連隊は後方に整列した

「我が軍は一個師団の力もない

各兵科の連隊が3つつあるのみである！」

それも、連隊といえるほど規模は大きくない

歩兵もあれから人数を増やしとはいえ、50人、これは一個小隊レベルだ

戦車連隊だった中隊よりも下のレベルだ

砲兵は小隊以上の規模はあるが

「したがって消耗戦になつてはならぬ！

ちよつとの損害も許されない！」

「気を引き締めて、突進である！」

元ソ連軍のジューコフにとって慣れないパターンだ
物量で敵に劣るのだ

一方、アルピオン、ハヴィランド宮殿 -

貴族議会にて -

「クロムウエル議長、どうされます?」

「敵はもう上陸してきました」

「…大丈夫だろう、特にサウスゴータには敵2万に対し7万がいる
トリステインごときが突破できる数ではない
さらに、正規の軍人は30万いるのだ、国民義勇軍だっている
そう…恐れる事はないと思うのだがね?」

「いやしかし議長!不安です!」

敵は我がアルビオンの艦隊を数匹の竜で壊滅寸前まで
追い込む装備をもっているのです!」

「それはこちらと同じであろう、ロサイスに
へんてこな竜が二匹いたはずだ」

「それも殺されました!」

「あれ以外にも場違いな工芸品は少ないがある、
君はトリステイン軍をあまりにも恐れすぎている」

「いや、しかし!…敵には義勇軍がいます
トリステインの軍隊よりも規模は小さいのですが戦闘能力は半端
ではありません!

現にそいつらにロサイスをやられたのです!」

「彼らは騎士とは違う!別な闘志をもっているのです!」

「騎士とはちがうねえ、まあ、サウスゴータの突破は馬で2日はか

かる、

そこに7万の我が軍がいる、ほかを回っても23万の軍が警備を行っている」

「ムリだろう、敵の突破は」

「近道であるサウスゴータを突破すると思われるが

サウスゴータは先ほどいた通り堅固な陣地だ、突破されたにしても

期間は一年以上はあるはずだ」

「そのあいだに王都に23万の兵士をかきあつめればいい」

この時クロムウエルは戦争よりも

友好国をつくろうと外交に力をいれていた

一方トリステインは違った

『100万火の玉』という国民1人1人が決死隊の気持ちで戦えというスローガンを元に

アルビオンとの戦争に勝つために必死であった

しかし義勇軍の間では

トリステインが段々日本に似てきたようなと思われる

多くは日本が負けそうな時からきた人で編成された軍隊なので

そうなられては困ると思っっている人が大半である

最初っから戦争末期気分ではやってられない事を義勇軍はよくわかっている

一方・トリステイン軍と義勇軍は -

ちよつとした戦闘があつたが

ロサイスの攻略に成功、僅か一日の陸上戦でロサイスを占領したアルビオン軍の敗因は兵力が分散しすぎていることだろう

17 アルピオン上陸（後書き）

ご意見、ご感想などがいましたらお気軽にどうぞ

18 決戦へ向けて

翌日 -

義勇軍は悩んだ

7万のサウスゴータをどう突破するか

かといって別ルートには分散しているとはいえ狭い大陸とはいえないこのアルビオンに

23万も兵士がいる、さらに国民義勇軍までいるとの話だ

一番手っ取り早いのはサウスゴータの突破だが

7万の兵士とどう戦うか…

ジューコフは決断を迫られた

「閣下、どうされますか？ 7万と戦いますが、23万がうるついでいるかつ

地形も複雑なルートを回って行きますか？」

「…」

「まずトリステイン軍と話し合う必要がある」

「そうですね」

その夜、ジューコフとド・ポワチエは二人で話し合いを行った

「貴方はどつちをとりますか？」

ジューコフが厳しい表情でポワチエに迫る

「無論、サウスゴータ突破ですな」

「少ない兵力で7万を倒したら23万は戦意を失うでしょう」

「勝算は？」

「あります！もちろんです！」

「うむ…しかし王都攻略にはサウスゴータを征する必要は確かにあります…問題は占領できるかですね」

「物量ではこちらは圧倒的に劣ります」

「すると…質では？」

「それは我々の圧倒的勝利です、私の視点から見れば今のハルケギニアから4世紀以上先の軍隊ですからね」

「なるほど、そいつは頼もしいですな」

「やるとしたら短期決戦にせねばいけません」

「よし、やりましょう」

「とりあえず乾杯です」

「はい」

トリステイン軍・大日本義勇軍は正式にロサイスを
前進基地としサウスゴータ占領へ向けて動きはじめた

トリステイン軍 -

「進めえー！！！百万！火の玉だあ！！！！行くぞお！！百万！！
どおんとお行くぞおお！！！！！！」

ド・ポワチエは熱狂的に叫んだ

（なんか負けそうだわ…）

最初っからこの勢いだと
負けそうだとルイズは思った

一方義勇軍 -

「サウスゴータ攻略、一週間以内におわらさなければ
アルビオンは王都に戦力を集中しはじめる」

「そうなれば我が軍に勝ち目はない」

「一歩も引かずに前進あるのみ！」

「うまくいけばこの戦い以外に苦しい戦いはない！」

「諸君！諸君は誇り高き侍だ！侍は不敗であるう！がんばるのだ！」

クロムウエルの方針としては

突破されそうになってから王都への戦力増強を行えばいいという
またクロムウエル自信トリステイン軍と義勇軍がサウスゴータに来
るとは

思ってもいないので23万の兵力は各地へ分散していた

集結には少なくとも一ヶ月はかかる、戦争の準備がサウスゴータの部隊以外
できていない状態で戦おうとした

サウスゴータの決戦：トリステインの作戦名は『早期決着作戦』

文字通り早くに戦いを終わらせようやという意味が込められている

大日本義勇軍の作戦名は『サ号作戦』、名前の由来はサウスゴータの『サ』から

トリステインに同じく早期に決着をつけるといふ目的もある

ただしトリステインが平和を求めるのに対し義勇軍の『早期』は物量の関係からである

この戦いについて義勇軍の軍人はこう述べている

(トリステイン新聞局の現地インタビューより)

「私はサウスゴータが迂回か迷った

しかし、23万と細々と戦闘をしつつ王都へ向かっても結局は7万と対戦になる

それならば戦力が万全である今のうちに征しすればよいと思った
幸い23万は分散していて集結には一ヶ月かかると予想される

ゲリラ攻撃も怖い、ド・ポホチ工氏と話し合い、決めたことである
トリステイン・義勇兵のご武運をお祈りする」

大日本義勇軍、ゲオルギー・ジューコフ元帥

「サウスゴータ攻略はアルビオン戦役で

最も重要な戦いと言える、その点このルートを選択した
ジューコフ元帥は立派であると私は思う」

大日本義勇軍総司令官、山下奉文元帥（大将）

「私はこの世界に召喚されていたい、ずっとこの八号と共に戦ってきました、ご主人だの貴族だの魔法だのいろいろ

ありました、そして今宵は来たるべき決戦の決戦で戦車連隊の連隊長として戦う事になり複雑な気持ちです」

はつきり言えば兵士達はまだまだ訓練不足です

はたして実戦で使えるか、そんなことなど最近ばかりは考えていますが私も弱い人間、日本に残された家族が心配です

もし私が死んでしまってもどうか悲しまないでください…というより

もう死んだ事にされてますが…父母、兄弟、そして曾孫の春奈、

一応別れの言葉はいつておきます、お元気で」

大日本義勇軍第一戦車連隊隊長中川浩二大佐

「なんなのよ！馬鹿なの2万で7万に勝てるわけ

ないでしょ！まあがんばるけど！」

ルイス

「飛行機が操縦できるならそれでいい

坂井さんも同じ事を言っていました」

大日本義勇軍航空隊、坂井三郎&西澤広義

「まさかこのような形で隼の操縦桿を再び

握ると思ってもいけませんでした、言葉はとくにありません

全力を尽くして戦うまでです」

大日本帝国義勇軍航空隊司令官加藤建夫少将

「俺はシエスタと一緒に戦えるだけでうれしい

シエスタ…愛してる、二人で生きて帰ろうな」

大日本義勇軍戦車連隊戦車兵、田口光雄上等兵

「私は死ぬまで光雄についていきます！」

大日本義勇軍戦車連隊戦車兵、シエスタ上等兵

「まったく、日本人つてのは正義感が強いというのか…

こんな他国の為に…真の大東亜共栄圏を本当につくろうと

していたのだろうか？俺も元合衆国の軍人として

がんばらなければ日本人に抜かされてしまう」

大日本義勇軍航空隊、カーチス・イエーガー少尉

「歩兵の本領を見せる時でありますな」

大日本義勇軍歩兵連隊連隊長、橋中佐

「アルビオン侵攻参加者の皆様、いかがお過ごしでしょうか？

私は海軍という立場上、陸軍と航空兵力が物をいう浮遊大陸での
戦い

には参加できませんが、心より勝利を願います

有賀艦長と共に海から見守ります」

大日本義勇軍海軍、連合艦隊司令長官伊藤整一元帥（連合艦隊設立
により昇進）

「私も、海から勝利を願います

もし海上で事件がありましたらお任せください

我々連合艦隊が対処します」

大日本義勇軍海軍、戦艦『伊勢』艦長、山口多聞大佐

皆、それぞれの思いを胸に…

戦場へ向かう…

18 決戦へ向けて（後書き）

ご意見、ご感想などがありましたらお気軽にどうぞ

19 サウスゴータ会戦 1

早朝、トリスティン軍『早期決着』 義勇軍『サ号』
それぞれの作戦が発動、敵にばねぬよう、慎重に近づいていった

キュラキュラ…

戦車連隊が先陣をきって
敵陣地へ近づく

「いよいよですね…」

シエスタが会話をふきかける

「シエスタ、がんばってくれよ、敵の撃破は
お前の射撃の腕にかかっている」

中川はシエスタを応援するかのようだったが
こういうのはかえって緊張させてしまうこともある
しかしシエスタは正直だった

「はい！」

車内につけてある無線で中川は命令した

「これより奇襲を開始する、最後尾の車両は後続部隊に
戦闘開始命令を下せ」

「了解！」

「よおしくし…義勇軍の底力を見せたる…」

そういつて、中川はヘルメットをとり

日の丸が描かれ七生報國と書いてある鉢巻を巻く

イメージ

七生 報國

彼の国とは、今はトリストインだ

火の玉なんていつてるが実はあれば下院が言ってるだけで

アンリエッタはそんな事は望んでない

数回日本兵と話をしすっかり影響されたか

近代国家へ近づく為に革新的な政策をとるアンリエッタ、

貴族の称号をもらい天皇陛下に代わる彼女への忠誠心を近いてのことだ

ヘルメットをとるのは非常に危険であるが

シエスタと田口も真似をする

田口は同じく日の丸に必勝と描かれたものを巻く

イメージ

必勝

シエスタはちよつと現代的だ

日の丸に大好きである

イメージ

大 好き

それぞれの思いを胸に
戦場へ行く…

「奇襲するぞ！田口上等兵！前へ！」

連隊長が乗る八号は発進した

それに中戦車や歩兵連隊、砲兵連隊が続く

「…て…敵だああ！！！」

アルビオン兵が叫んだ時には手遅れ

義勇軍は攻撃を開始していた

戦車連隊は突撃する

戦車は走るだけで武器になるが

アルビオン軍はすでにそれを経験済み

入り込もうとした

しかし入り込もうとして兵士は歩兵に倒された

ダダダ…

「ぎゃあああ！！！！！」

「…のぉ…」

平民の兵士は槍をぶん回してきた
しかし義勇兵はなんの驚きもしない、ただ発砲するのみ

ダダダ…

後方の砲兵連隊 -

「戦車連隊より連絡が入った、攻撃開始だ
どうやら最初の相手は2万の敵の陣地だ」

「2万かあ…でけえな…」

「これより我々砲兵連隊も向かう」

「ゆくぞ」

牽引車などないので馬に砲を引つ張らせた
遅いが人が運ぶよりはマシである

トリステイン軍 -

「進め進め！サウスゴータを陥落させれば戦いを有利に展開できる
！」

「うおおおお！！！」

平民で編成されたトリステイン軍は
1万の陣地に突撃する、兵力はトリステインのほうが多い
ちなみにより分散はしていない為、後退すればすぐに合流できる

アルビオンの主要部隊はシティオブサウスゴータの手前の4万だ

今はじまった戦いは定規にすれば、ほんの1ミリ程度にすぎない

「よし！行け！」

戦いに参加したギーシュはワルキューレを

7体召喚、時間稼ぎをする

10分後に全滅するがトリステイン軍主力部隊が
到着するまでの時間稼ぎには十分貢献した

「突撃イイ！！」

すさまじい白兵戦が展開された

空軍壊滅のせいかアルビオン軍の士気は落ちていた

そのおかげで士気だけは高いトリステイン軍はすこし有利に戦った

「このまま行けば勝てる！！」

「いけえ！！」

19 サウスゴータ会戦 1 (後書き)

ご意見、ご感想などがいましたらお気軽にどうぞ

20・サウスゴータ会戦 2

「いけえ！」

隊長が叫ぶ

トリステイン軍は突進した

「うおおお！！！！！」

男たちの叫び声が聞こえる

主力部隊は何度も戦いに参加した精鋭の人間が多い
アルビオン軍をみるみる打ち負かしていった

一方、義勇軍・

「突撃イ！」

火縄銃やマスケット銃の銃弾が飛び交う中
突撃ラツパと共に歩兵連隊は戦車連隊・砲兵連隊の支援を受けつつ
突撃した

一発撃つたら次撃つまでに

時間がかかるハルケギニアの銃と違い

義勇軍の銃は連射できる、その点でも有利だ

さらに装甲された戦車に高い威力をほこる砲、鬼に金棒である

司令部・

「閣下！ 中川大佐より電報です

我進軍中、敵ハ後退セリとのことです」

「そうか…引き続き進軍を続けるように言ってくれ」

「わかりました！」

「…あとは…航空隊が陸軍を支援するはずだ

ロサイス基地 -

バババ…

「コンターック！」

と叫ぶのは元海軍軍人、
加藤隊長を戦闘に次々と航空機が離陸した

義勇軍本部 -

「ただいまジューコフ元帥より連絡が入りました、
順調に進軍中とのことです」

「そうか…犠牲者は？」

「今の所0です」

「…よかった」

「今は1人だつて貴重なのだ、がんばってくれ…」

サウスゴータ

「よし！ 我が連隊が再び戦闘になるぞ！」

中川の叫び声と共に

戦車連隊の戦車は歩兵連隊を抜かし敵陣へ突撃した

ギイッ

八号が停車した

「シエスタ！ 目標はあの小屋だ！」

「はい！」

あの木造の小屋はおそらく

司令官がいる場所、今司令官がいるかはわからないが

あそこをうつてもし司令官が戦死すればこの陣地の指揮系統は崩れる

「撃ち方始め！」

ドゥン！

榴弾を放った

そして木造の家はぶっ飛んだ

「命中しました！」

「よし！進軍だ！」

「突撃開始！」

ハッチをしめ戦車を走らせる
ひき殺すのも武器だが機関銃も武器だ

ダダダ…

はっきり言えばこの戦い、軽いものだった
アルビオン軍の陣地には塹壕などの防衛陣地がまるでない
突破は簡単だ

典型的な戦いになった
守るよりも攻むるほうが有利

その時、

「この！馬鹿！馬鹿！」

聞き覚えのある声がした

「なんだ！？」

するとこっちにルイズが走ってきた
敵に追われているみたいだ

「目標、ルイズを追っている敵軍！」

八号の砲塔を回しうまくねらいを定める

「シエスタ、ちょっとでも外れれば…」

「わかってる！ルイズは殺さない！」

ダウン！

「ぎいやああああ！！！！！」

「きゃあ！」

狙いどおりに玉は命中したが
ルイズも倒れた

「田口！」

「はい！」

「後続車両は我に気にせず進軍しろ！
後で必ず合流する！」

「了解！」

中川は確認した
ルイズを狙う敵軍はまだ20人以上いた
戦車を向かわせルイズを救出しようとした

20・サウスゴータ会戦 2（後書き）

ご意見、ご感想などがいましたらお気軽にどうぞ

21 サウスゴータ会戦 3

ルイズの近くで八号を停止させる

「撃ち方はじめ！」

ドゥン！

一発目は外れるも至近弾で3名ほどが血を流したのを確認
続く二発目は中央に命中

それでも3人が生き残りこっちにやってくる
なんか三人のうち2人はメイジだ、魔法を放ってきた

中川は急いでハッチを閉め戦車をルイズの前に動かした
ルイズが殺されないように戦車が盾になる

「そんな！危険です！コルベール先生はメイジの魔法は
兵器にも有効だって！」

「大丈夫だ！！！」

砲塔を大急ぎで回す

メイジはすぐそこに迫っている

一瞬なにかかすった音が聞こえた
メイジは魔法を放つも外れたのだろう

「今です！」

機銃を放つ、たちまち3人は倒れた
敵がない事を確認して中川は戦車から降りる

「ルイズ！大丈夫か！？」

「う…ううん…」

「浩…？？」

「生きてたか…よかった」

「…ありがとう」

「ん？」

「感謝しただけよ！」

「そうかい」

「ぎゃああ…！」

「なんだ！？」

中川が目をむけたら
そこにはくろがねが

そして肩から血を流している人が後ろに

「どつした！？」

「やられたらしい！」

そこへ衛生兵が駆けつけた
担架で担ぎ込んだ

「しかし困った、後ろの機銃を撃つ人がなくなっただ…」

「やれたのはくろがねの機銃手、機銃は現地で改造、取り付けたもの」

これでは武器を持たない豚と同じだ

「畜生…敵の狙撃兵は機銃手を狙ったか…」

「致命傷じゃなくてよかったが…」

「そういえばルイズ、何でお前こっちに？」

「それは…無謀な作戦よ…」

「無謀？」

「うちの軍が義勇軍は多分苦戦してると思って
私に虚無で戦って来いって…戻る事は許されないって…」

「それではバンザイ突撃ではないか!？」

「…」

「中川大佐!!!はやく!!!敵30がこちらに!!!
距離500!!!」

「わかってる！！、もしもの場合はお前らだけで戦闘しろ！！」

「了解！！」

二人で自衛戦闘を行えと命令した

「ルイズ、お前機銃は撃てるか！？」

「まあ…いつも見てたから使い方は…」

「こいつらの機銃手になってやってくれ」

「えっ！？でも！？」

「いいかルイズ！我が軍は有利に戦いを展開している！！
決して苦戦はしていない！！」

「！？」

「お前のバンザイ突撃は無意味だ！！
だったら仲間と共に行動しろ！！」

「戦場で1人は危険すぎる！！」

「こ…浩…でもそんなことしたら！！」

「責任は俺がとる！！俺は契約上お前の使い魔だ！！」
「お前の責任は俺がとるのが道理だ！！」

「！！」

ドゥーン！

その時戦車砲が火を噴く音が
敵がきてしまったらしい

「…浩二…アンタって人は…」

ルイズは顔を赤く染めて恥ずかしそうに喋った

「なに考えてるのよ…馬鹿！」

「お前にとって名誉の為かもしれないが

そんな事はどうでもよい！！ 貴族など関係ない！！

お国の為に、国民の為に全力を尽くすのが軍人だ！」

「じゃあそのバンザイ突撃もそれよ！」

パシッ

中川はルイズの頬を平手うちした

「！！！」

「馬鹿！！俺も帝國軍人の誇りとして

自決をすべきだとか玉となって砕けると教えられてきたし

それを実行しようとした！」

「だが今更になってわかった！軍人は戦えるうちは戦う！

死にいくのではない！！戦いに行くのだ！！！」

「そりゃあ戦いには愛国心とかも必要さ、

でも、無駄死にはよそうってことだ」

「かえって敗北を早めるだけ、それは俺も身をもって経験済みだ」

「ア…アンタ…って人は…」

「前々から好きでしたって言っちゃったらどうするのよ…!」

「今なんて？」

「好きなのよアンタが…!」

「えっ？」

「はっ!!しまった!!」

「馬鹿馬鹿!!今の聞こえなかったよね？」

「いや、ハッキリと」

「そそそ…そんな…」

「大丈夫だ、砲撃や、今きち航空隊の飛行機の音で

あいつらには聞こえてない」

「よ…よかった…」

思いもよらぬルイズの告白に

戸惑った

使い魔としかみていなかったはずなのに

「始まりはタルブよ…虚無で倒れている所を

「妙にやさしくしてくれまし勢いよく貴族になっちゃっし…」

「しかもアンタが戦った戦争の話聞いて

ただの私の使い魔癖に偉いなと思ったり時には尊敬しちゃったり

…」

「ホント最近おかしいのよ…私…」

「…」

「なにいつちゃってるんだろっね私」

素直になりたくないらしく

今まで言った事をすべて自分の仕業にする

中川はルイズに何を言うのか

21 サウスゴータ会戦 3 (後書き)

ご意見、ご感想などがありましたらお気軽にどうぞ

22 サウスゴータ会戦 4

「…」

「ホント…どうしちゃったんだろうね…」

「…おまえ…もしかして？」

「なによ？」

「素直になれんとか？」

「なっ！？ そんなわけないでしょ馬鹿！」

素直になれないのかという
質問に対しルイズは反抗した

「そこまで怒ることでもないだろ、

ただ、俺が言いたい事は戦争で素直に真実を述べなければ

それは時に大敗を招く事がある」

「お前は俺の事がすきなのはわかった、

ぶっちやけていえば俺もお前はかわいいと思う」

「…!?」

こーゆー、真剣そうにみえて以外とベタなのが『ゼロの使い魔』で
すよね ^ ^
だがこれがいい

by 作者

「どうなんだ！？本当の所は！？」

「…」

「戦争と同じだ！黙り込んで大敗を招くことがある
今回唯一の救いは両思いじゃないってことぐらいだ」

「じゃあ…なんで私の事が好きみたいに言うのよ？」

「はい？」

「実は浩二も私の事好きなんですよ！！」

「そ…そんなわけは…」

実際ルイズの事はあまり好きではなかった
奴隷扱いするし、第一タイプでもない
かわいいのは認めていたが

「…だったら浩二こそ本当の所を言いなさい！！」

「…」

ここで嫌いとか普通とかいっただら
お仕置きされるだろう…

だからといって嫌いでもないし…

今のルイズなら別に付き合っても悪くはない
それに田口、上等兵ごときに彼女がいることが

一番許せなかった

そう思っていると次第にルイズが恋しく見えた

(馬鹿野郎!!俺はなにを!!)

(帝國軍人が異国の女子に恋するワケには!!)

そして…とつさに言ってしまった

「す…好きだ!」

「…ほんと?」

「あ…ああ!」

「浩…馬鹿!」

「えっ?」

「そ…そういう事は戦いが終わってからにしてよね」

「あ…ああ…」

「じゃあ私は約束どおり機銃手としてあの車の後部座席に座るから」
「生き残ったらまた後でね」

「あ…うん…」

「いきましょ!!また狙撃兵に狙われているかもしれない!」

そういつてくるがねはルイズを乗せて
全速力で走った

その頃中川も戦車に戻る

「遅いですよ！」

「すまん、ちょっと重要な話をな」

「そうですか、では合流しに」

「無線では敵は後退を開始したとの事です！」

「よし！向かうぞ！」

中川が話をしている間に

アルビオン軍は後退を開始したとの事

後退し後方の主力部隊と合流して攻勢をかけるつもりだ
そうはさせるかとひとりでも多くの戦力を削ろうと
義勇軍は努力した

一方トリステイン軍は互角の戦いを演じていた

「畜生！敵は少ないながらやりおる！」

そこへ

ダダダ…

「おお！義勇軍の竜だ！！！」

「神よ!!」

坂井と西澤がトリステイン軍を
支援しにきた、どうも竜騎士の迎撃はないので
暇だったらしい

「今だ！敵はひるんでいるぞ！」

「うおおお!!!」

坂井と西澤の機銃掃射のおかげで
アルビオン軍の兵士はひるんだ
その隙にトリステイン軍は一気に攻勢をかける

「撤退!!主力部隊と合流するぞ!!」

こちらのアルビオン軍も撤退し主力部隊と合流して
攻勢をかける作戦に出た

「進め!!合流されたら厄介だぞ!!」

「1人でも多く殺せー!!」

トリステイン軍は弱小だけに必死だ

1人でも多く殺してアルビオン軍の戦力を削らねばいけない

一方義勇軍 -

「突撃イ!!!」

2回目の歩兵連隊の突撃が行われた

ここまで奇跡的に義勇兵は誰も死んでいない

ものすごい早さで銃を放ちアルビオン兵を倒してゆく

両軍は今、アルビオン軍を圧倒している

22 サウスゴータ会戦 4（後書き）

ご意見、ご感想などがいましたらお気軽にどうぞ

23・サウスゴータ会戦 5

アルビオン軍、サウスゴータ守備隊司令部・

「閣下！ 第一防衛陣地と第二防衛陣地の兵士達が後退を始めました」

「うむ：やはり材料がないのでは、私がかつて砂漠でつくったような防衛陣地は造れぬか：唯一の救いはこの世界に総統がいない事だ：死守せんでも済む」

「とりあえず、生き残りは？」

「2万ほどです」

「合流して、戦おう、それでダメなら我々が後退しよう」

（最も：こんな国の為に私は戦いたくはないのだが…

軍人である以上仕方ない…）

（それにここには親しい人もいる、守らねば）

（最善を尽し、防衛する）

はたしてアルビオン軍サウスゴータ守備隊の司令官は誰なのだろうか？

ヒントは砂漠と総統

その頃、中川は戦車連隊の仲間と合流した

「どちらへ？」

「後で話す」

戦車連隊のほうに
なにかはしってきた、さっきわかれたルイズも乗っている

そう、あのくろがねの役割は
情報を運ぶことだ

情報部の陸戦部隊だ

「皆さん！！！こちらの9800とあちらの10000が合流しました！！！」

「2万：さきほどと同じになったか、よし！これより電撃戦を開始する！」

電撃戦とは第二次世界大戦時ドイツ軍が

使った戦法、戦車や航空機、機械化した歩兵が敵に反撃の隙を与えずに

進撃するものである

しかし電撃戦を妨害するものもいた

竜騎士隊の迎撃が今更きたのだ、数は20ほど

「まずいぞ…戦闘機隊はトリステイン軍の援護にいった…」

「戦車連隊長の中川殿！！我々にお任せください！！！」

そう伝えられた後すぐに発射音が轟く

砲兵連隊の高射砲部隊が砲撃を開始した

たしかに高射砲ならタルブの戦いでためもとでうった拳銃の弾よりも

信頼できる、しかも竜は遅い、高射砲の餌食だ

「…ほう…戦闘機はいらなかったようだな…」

10分間に高射砲5門が竜20匹中12匹を撃墜、残りは撤退した

その竜騎士隊も…

「畜生…地上からの砲火のみでやられてしまうとは…」

「誇り高い竜騎士隊の我々として…一生の不覚であります！」

その時、うしろからレシプロ機の音が

「な…まさか噂の!？」

「球撃つ竜がきたぞおお!!!!」

3倍もの戦力で挑んでも

地球の戦闘機にはかなわない竜騎士隊だが今回は

ほとんど高射砲に落されてしまった為8匹で応戦するしかない

一方戦闘機 -

戦闘機はたった2機だ

加藤少将の隼と仲本飛曹長の陣風だ

「敵機発見！ 仲本！準備は！」

「いつでも!」

「私についてこい!」

「はい!」

二機は高度をあげる

竜騎士は恐れをなしてか逃走を始める

しかし戦力を温存されてはたまらないので

悪いとは思ったが撃墜した

ダダダ…

上からの奇襲攻撃

『一撃離脱』

根性で仲本の後ろについた竜もいた

しかしこれも作戦、まんまとひっかかったといっても過言ではない
後ろから加藤が攻撃する!

ダダダ…

「うわああ!」

これぞ『ロツテ戦術』である

またの名をアメリカ海軍のジョン・S・サッチ海軍少佐がこの動き

を「ウィーブ」（機織り）
と呼称して対零戦戦法に有効であると提唱した事からサッチ・ウィーブ（サッチの機織り）

この戦術は効率の良い戦術とされ
現在も世界中の空軍が採用している
その他の竜もあつとい間に二機に落された

一方陸軍は進撃を続ける
後退するアルビオン軍を追い詰める

トリステイン・義勇軍はシティオブサウスゴータへ着々と迫る
この時、義勇軍はトリステイン軍と合流、トリステイン軍の司令官は
びんぴんしている義勇軍を見て愕然とした
そしてちかくにいたルイズにバンザイ突撃にいかせた事を謝罪した

アルビオン軍、サウスゴータ守備隊司令部・

「もうすぐそこまで迫っています…いつそ今、攻勢をかけては？」

「いや…無闇に動くのはむしろ危険である、
全軍戦闘態勢に入れ、命令は私が下す」

司令部・

「閣下！電報です！
敵主力部隊発見、攻勢ヲ仕掛ケルとのことです」

「予想以上の早さだ、この分で進撃すればアルビオンを一週間で

攻略できるぞ！」

ジューコフは喜んだ

予想以上の進撃のスピード、これなら
アルビオンをおったり倒せる

この事は本部にも伝えられ

山下は笑みを浮かべた

「…強いですな…我が軍は…」

「ええ…とくに実戦部隊のほとんどはベテラン軍人ですからね」

「まったく…ここまでやってくれるとは関心したよ、私も」

サウスゴータ会戦もいよいよ

最後の決戦、2万のトリステインと合流した義勇軍と総勢約6万に
ものぼる

アルビオン軍との戦いが始まるうとした

23 サウスゴータ会戦 5 (後書き)

ご意見、ご感想などがいましたらお気軽にどうぞ

24 サウスゴータ会戦 6

一方、自宅から1人の少女が戦いを見ていた

(…ドイツのおじさん…)

(大丈夫かな?…)

彼女も後で重要人物となる人物である

アルビオン軍、サウスゴータ守備隊司令部

「閣下！合流しました！！」

「よし、命令する、攻撃開始！！シティオブサウスゴータを防衛せよ！！」

「はい！」

約6万のアルビオン軍に一気に
攻撃開始の命令が下され
総攻撃をしかけた

トリスティン・義勇軍

「敵が大攻勢をしかけてきたぞ！！」

「恐れていた事態だ…航空支援がなければだいぶ苦戦するだろう…」

「しかし！航空機は燃料の関係で帰投しました！」

「…やはり…電撃戦だ！航空機がなくても辛うじて実行できるはずだ」

「トリスティン軍にも伝えろ、電撃戦のやりかを教え、そして実行に移せと」

「わかりました！」

歩兵連隊長橘中佐は快く

中川の命令をききトリスティンの元へかけていった

歩兵連隊へは中川大佐の命令で動けと
言い残して

「お〜い！！トリスティンの皆さん！！！」

「あ、貴方は義勇軍のものですか？」

「はい…実は作戦についてで…」

電撃戦のやりかたをおしえた

「うむ…装備では劣りますが…よはあなた方のまねをすればよいということですね」

「はい」

「よし！皆！突撃だ！！むむ」

トリステイン軍と義勇軍も電撃戦という作戦で
立ち向かう

「撃ち方始め!!」

ドオン!

野戦砲5門が撃つ

そのうち3発は命中、次々と弾を打ち込みさらに歩兵も突撃
トリステイン軍は総攻撃、反撃の暇いとまを奪う

そろそろ3時頃、おやつの間だが

両陣営はそんな事などわすれ、戦い続けた

逆に攻勢をしかけたアルビオン軍が劣勢に陥った
電撃戦とはそれほど効果のある戦術だ

アルビオン軍、サウスゴータ守備隊司令部

「閣下!攻勢をかけたはよいのですが!!」

「こちらが劣勢になりつつ!!」

「竜騎士は?」

「もう王都に10騎いる程度です!」

「うぬぬ…まずい…負けるかもしれないぞ…」

「そ…そんな!!私は貴方に賭けます!!」

元の世界では敵にも味方にも尊敬されていたのでしょー!!」

「…しかし…限度がある」

「敵は装備がよい、しかし我々はどうだ？」

「口クな装備がない」

「ですが…我が軍の最新装備を配備して…」

「私の目線からみれば骨董品だ！

あんなので機械化した敵軍に立ち向かえるはずがない!!」

「…」

「…お前…王党派だったな…」

「はい…」

「私は考えた」

「なにをですか？」

「今…敵軍に降伏し、仲間となって共に

アルビオンと戦わないか？」

「ええ!?!」

「たしかに！私は王党派で神聖アルビオンの事を

あまりよく思っていますせんが!!」

「貴方が貴族派に殺されてしまいますぞ!!」

「…いや、そうしたほうがいい」

「サウスゴータの民間人を外交のちよつとした本当に
どうでもいいことで始まったこの無意味な戦い…
巻き込むべきではない…われわれもこんな下らない戦い、するべ
きではない」

「…元帥…」

「特使として私が自ら向かう」

「えっ！？ 危険ですよ！！」

「いや…本来將軍も、前線で戦うべきだと思う」

そういつてアルビオン軍サウスゴータ守備隊の

総司令官は自ら特使としているいろいろ飛び交う戦場へ言った

危険ではあるが彼の作戦を遂行するには
必要であつた

数々の危険を伴いながらもなんとか
義勇軍と出会う

「うわあああ！！アルビオン軍だ！！！！」

兵士は発狂しているのか
銃を撃とうとした

「待ちなさい！！我々は戦う気は！！！！」

「うっ…うるさああい！！！！！！」

「待て！！村井！！」

「…橘連隊長…」

「…まちがない…あなたは…」
「ドイツのロンメル元帥…」

24 サウスゴータ会戦 6 (後書き)

ご意見、ご感想などありましたらお気軽にどうぞ

25 サウスゴータ会戦 7

橋中佐が

男の名を言った

「そうですよね…ドイツのロンメルですよね？」

「そうだ」

正直びつくりした

敵からもみかたからも尊敬されたドイツ軍の名将がなぜ
アルビオン軍の指揮官なのか…

その後、ロンメルは全軍に停戦命令を下す
義勇軍やトリステイン軍も停戦した

先陣をきって戦った中川大佐と

ロンメルは話をした

「…そうですか…」

ロウメル元帥がいうには

1年前にこの世界にきていらい、帰り道もわからないままさまよっ
ている所を

ティファニアという少女に助けられサウスゴータに住む

そして正式にアルビオン国籍を取得し軍に入る

平民という扱いだつたがすぐれた土指揮能力で当時の元帥が彼を気に入り後継に選んだという

その為、一部からは反発があるもののそれでも高い指導力で軍隊からも、またサウスゴータではやさしいおじさんとして親しまれ尊敬をあつめていた

根っからの王党派になる、レコン・キスタのクーデター時は陸軍を指揮

抗戦するも世界から集まった貴族派に敗れた

それでも優秀な戦術家として神聖アルビオンでも重宝され

地位は陸軍元帥はおろか共和国元帥にまで昇進

平民で反感を買われつつアルビオンで最も

人気のある軍人だった

「…なるほど…」

「そついうわけでしたか…」

「そこで…どうですかね？」

「私と手を組んでくれませんか？」

「すくなくとも王党派2万は味方につきます」

「信じてよろしいのですか？」

「私は…こんな無意味な戦いなど…」

「それに神聖アルビオン共和国など…」

中川は決断を迫られる…

意見は賛否両論だ

このまま組んで一気に快進撃という意見もあれば

途中で裏切るなども

中川が悩んでいる所に
少女がやってきた

「あの…」

「ん？」

「ティファニア…」

ロンメルの命の恩人である
ティファニアだ

「さきほどの話はすべてきてきました！

ドイツのおじさんは嘘なんてつきません！」

「お願いします！ドイツのおじさんを信用してください！」

彼女の目は真実を

語っているかのようだった

「…」

「…」

これに一同は…

ロンメルをうけいれた

「お嬢さん…ありがとう…ロンメル元帥は

正直だとなんとなくわかったきがします」

「あ…ありがとうございます！」

その後、中川は電報を送った

司令部

「一時休戦 敵ノ司令官ハロンメル元帥」

「な…なんだって？」

「ロンメルだと？」

その名をきいてジューコフは驚いた

このロンメルも別な世界の地球からきたらしく
1942年、砂漠の嵐の中突如消えてしまったらしい

「…勝てるぞ…」

「えっ？」

「彼がもし味方になったとしたら！」

3日でアルビオンに勝てるかもしれない！」

ジューコフも恐れるほどの

戦術家だ、『砂漠の狐』はすごい知名度である

その後、ロンメルはこっそり

王党派の軍人を2万人あつめた

5時、あと一時間で日は暮れる

この時、トリストイン・義勇・そしてアルビオン反乱軍が
指揮系統を失った4万の貴族派アルビオン軍に攻撃しかけた

長いこの会戦もいよいよ終盤となった…

25 サウスゴータ会戦 7 (後書き)

ご意見、ご感想などありましたらお気軽にどうぞ

26 サウスゴータ会戦 8

5時頃、あと一時間で日が暮れる頃

約4万のトリステイン・義勇・反乱軍の連合軍と約4万の貴族派アルビオン軍が

戦闘状態に入った

「突撃イイ!!」

突撃ラツパと共に大勢の兵士が

戦いに勝つために突撃する

ちょうどその時、戦闘機や攻撃機による第二次攻撃隊が到着した

「またせた！支援を開始する！」

指揮系統を失った

アルビオン軍は

抵抗する間もなく連合軍に押される

制空権は既に連合軍のもの

指揮官はほかの王党派兵士と共に寝返った

アルビオン軍に勝機はもはやない

ダダダ

義勇軍が先頭で戦う

電撃戦はますます進む

アルビオン軍は後退する

しかしそんな暇すら与えない勢いで
連合軍は進軍した

「シティオブサウスゴータに入れさせてはならぬ！ 全軍突撃！」

「撃ち方始め！」

ドゥーン！

大砲何十門が一気に弾を放ち
戦車も戦車砲から榴弾を放つ

機械化歩兵は突撃

そのうしろからトリスティン、反乱軍兵士が
アルビオン軍を攻撃する

さらに航空機の攻撃

一気が数秒機銃を撃てば何十人も死ぬ

「よし！勝てる！勝てるぞおお！！！」

連合軍兵士の士気は一気にあがる
皆勝利を確信した！

シティオブサウスゴータまでできてしまった
そこで多くのアルビオン軍は武器を捨てて逃げていった

「うわああ！！！」

「た…退散！！！」

その後もちまちました戦闘はあったものの
実質、サウスゴータ会戦は終わりをつけた

結果は王党派が反乱、トリステイン・義勇・反乱軍の連合軍の圧勝
この歴史に残る会戦に連合軍は勝利した

シテイオブサウスゴータには本来書く民義勇軍4万がいるのだが
みんな王党派であったため、住民との戦闘は起こらなく
むしろ解放されたと認識する者のほうがおかつた

この戦いで連合軍のうち
トリステイン、7500人、義勇軍1人、反乱軍80人が死亡した
義勇軍はただ1人…そう狙撃された情報部の人だ
搬送されるまえに出血多量で死んでしまった

だがそれがいには軽い怪我を負う程度で済んだ

一方多くの犠牲を払ったトリステイン軍は
悲しみに満ち溢れていた

予想はついていたがこれほど多くの戦死者がでるとは…

ただアルビオン軍は12000人が亡くなった
義勇軍は大活躍をしたがトリステインも大活躍した
多くの犠牲をはらったがアルビオンに大損害を与えた
ちなみにアルビオン軍の生き残り2万は仲間に、残りは敗走

アルビオン軍は全体的にみれば

壊滅的でもなんでもないがクロムウエルの政策で
兵力が分散、また負けそうだという部下の忠告を裏切りなお
集結をさせなかった

今更戦力を集結した所で遅い…
アルビオンの負けは明らかだった

26 サウスゴータ会戦 8 (後書き)

ご意見、ご感想などありましたらお気軽にどうぞ

27 ティファニア

夜 -

ロンメルの現在住んでいる家があるウエストウッド村の宿泊施設を
義勇軍はかしてもらった

本来トリステインとかが宿泊しそうなのだが
トリステインは勝利は義勇軍のおかげと権利を譲ったのである

そしてこの夜、義勇軍兵士達は
酒を飲んだ

決戦とも言えるべきこの戦いに勝利
したことを純粹に祝う

「乾杯！」

義勇軍の兵士、歩兵連隊と戦車連隊、航空隊、今回活躍して
いない
が海軍の

軍人はほとんど日本人
硫黄島や沖繩戦でまつまり、ロクな武器もないのにアメリカ軍
を苦しめる事ができるあの日本軍の軍人である

さらに地獄を見た彼らにとって

アルビオン侵攻はさほど苦痛でもない

太平洋戦争緒戦に見られた

兵士達の笑顔がよく見られる

中川たちもまた、ほかの義勇兵と共に

酒を飲んでいた
その後、宴会が終わり
各員、寢床につく

「……」

中川の部屋の前にルイズがいた

「生き残ったの？」

「死んでたらここにいない」

「そう……よかった」

「……いいなさいよ」

「なにを？」

「……今日の朝言った事」

「……好きだ……」

「……!?」

「馬鹿!! 嬉しくなっちゃうじゃないの……」

ちよつと怒られた中川

彼はこれ以外になにかいったかと思った
先ほどあんな事をいわれ

中川の心は複雑であったが今は違う
ルイズが好きであった

「

…」

二人は一瞬黙り込んだ

しばしの沈黙の中

最初に喋りだしたのはルイズだ

「だから…よ…よろしくね！」

わざと強く言ってみたんだ

しかしこれはルイズが

平常心を保つ為の一種の

手段なのかもしれない

しかしこのルイズ、原作よりテレ要素が

多い気がするが気のせいかな？まあそんなことはどうでもよい

「ああ…よろしく」

ひとまず中川は答えた

「…浩二…私本当にしぬかと思った」

「…まあ…お前が引き受けた命令は…」

バンザイ突撃みたいなものだしな…」

「虚無はまだ使いこなせてないのに…馬鹿…」

「あの時…どうせ死ぬなら誰でもいいから結婚したいと思った」

「えっ？」

「…ホントに誰でもいいから」

「でも今は…ああもう！恥ずかしくていえないじゃないの！！」

「聞かれてたらどうするの！」

なぜか自分の言った事に怒る

平常心を保つ為だろうか？

「いや…俺に聞かれても…」

どうしても言いたいなら小声で言えばいいじゃないか」

「わかったわ…」

「ちよつと耳近づけて…」

中川のアドバイスで

ルイズは小声で話すことにした

「さつきも言ったけど…どうせ死ぬなら

誰とでもいいから結婚して生きている証拠をつくりたかったの」

「…でも今は違う…生き残って…それで…気持ちがかわった

浩二！貴方と結婚がしたい！」

「なっ！？」

いくらなんでもおどろいた

自分の事を使い魔…というより奴隷に

等しくあつかっていた…といっても最近の態度が

変化したとはいえたまに厳しいお仕置きをするルイズが

自分と結婚したいだなんていうことに

「…馬鹿…ほんとに…サウスゴータで
先頭にたつて指揮して必死に戦う姿…かつこよかったよ…」
「リーダーに向いてるみたいね…浩二って…」
「ほんと…誰譲りなんだろうね、お父さんかな？」

「親父？」

「ねえ…浩二のお父さんってとどんな人？」

「えっと…陸軍の大佐だったかな」

「そう…そこそこ偉い人？」

「わからん…けど軍人らしいいい人だった」

「ここで皆さんなら

思いつくでしょう

苗字が中川で陸軍大佐

実際に存在した人物が

彼、中川浩二の父親だ

もちろんこの小説だけの設定だ

陸軍士官学校30期卒

1944年に大佐に昇進、ペリリュー島の

守備隊長になり熾烈な戦いを繰り広げ

自決した…そう中川男大佐

自決後に二階級特進で中將になった男だ

「…そうなんだ…そういえば
浩二も大佐だもね、お父様に並べたじゃない」

「いやあ、父に比べれば俺はまだひよっくにすぎんと思っ」

「素直に認めるそういう所も好き」

ルイズは浩二に近寄り

口づけをしようとした…が…

「あの…なに…して…」

「いつ!?!」

「げっ!?!」

「あ!?!す…すみません!」

「あ…あやまる事ないわよ!」

「そうだ! 貴女に罪はりません!」

そこへ突然

ティファニアが現れた

彼女がいうに最初から聞いていて

どうしようかなと思いつつ

わざと現れて見たという…

「お二人は仲良しみたいですね」

「は…はあ〜」

「がんばってください、影で応援しています」

「ど…どうも…」

ティファニアは

今回の事は黙っててくれるらしく

応援してくれるらしい

これがトリスティンの貴族とかだったら

見逃されないだろうが…

ルイズはヴァリエール公爵の娘だっていうし

「そういえば、ティファニアはどこでロンメル元帥と出会ったのですか？」

ロンメルから一応話しは聞いたものの

ティファニアからもう一度聞くことにした

ロンメルがなんでティファニアと知り合ったかも気になる

「あのドイツのおじさんですか？」

「はい、私はマチルダ姉さんと散歩していた時でした」

回想 -

「あれ？マチルダ姉さん！人が倒れてます！」

「えっ!?!」

マチルダ（フーケ）とティファニアは
人が倒れているのを発見し
即座にその人の下へむかった

「…軍人？」

「…みたいですね」

「まずい…相当衰弱している」

「運びましょ！」

「はい！」

こうした二人は倒れていた人を自宅まで運び
看病した結果、翌日見た時彼は起きていた

「あ、」

「おはようございます、大丈夫ですか？」

「…もしや…君が私を…」

「はい！」

「…すまない、なんと礼を言っていないかわからぬ」

「いや、いいんですよ」

「あの…見た事ない服装ですね、軍服ですか？」

「まあ…」

「どこの軍人ですか？」

「ドイツチュラント…いや外国人には

ドイツと言ったほうが早いかな…」

「今ついでに紹介する、名はエルヴィン・ロンメル

ドイツで元帥をやっていた」

「ドイツのおじさん…偉かったんですね」

ここでティファニアは始めて

ロンメルをドイツのおじさんと呼んだ

その後ロンメルは前にもいった通り

軍隊にはいり元帥の座を譲ってもらい一躍有名になった以降、ティファニアを殺そうとする者がいなくなったのも

ロンメルが王家や軍に説得したからである

ティファニアはロンメルの事を命の恩人と思っている

逆にロンメルはティファニアとマチルダ（フーケ）を命の恩人だと思
い

二人を実の娘のように可愛がったという

現実 -

「だからこうして普通に外を歩けるようになったのです

ドイツのおじさんには本当に感謝しております」

「実のお父さんのように接してくれてとても嬉しいです…」

ハルケギニアでロンメルはいい奴らしい

その時、見覚えのある女性が

「ん!？」

「あつ!アンタは!！」

「げっ!？」

「土くれの!！」

「マチルダ姉さん!！」

「へ?」

「ティファニア!よかった、久しぶりだな」

意外だった

「ねえ…もしかしてマチルダ姉さんって…」

「この人です!！」

「…うそ…よね?」

「あいつがティファニアの言うとおりに優しい人なのか?」

マチルダを盗賊かつタルブの戦いで敵対した

悪にしか思っていないルイズと浩二にとっては
意外すぎる事実だった

さらに深夜・

「ちょっと、あんたたち」

とってフーケことマチルダは

中川（以下、苗字ではなく名前の浩一と表記）とルイズを呼んだ

「…というわけなんだ…」

「つまり盗みを行っていたのは？」

「そう…孤児院に仕送りするためよ」

「で…でも泥棒は犯罪よ！」

「わかっててやった、ティファニアがかわいすぎてな…」

「だが…もう仕送りは不可能なのはわかった、それでだ」

「頼みがある」

「なんだ？」

「戦争が終わったらティファニアを

トリスティンに連れていってくれないか？」

「な…何故？」

「あいつもほら…いい歳だろ、そろそろ外の世界を

知るべきだと思うし、本人もそれを望んでいたわ」

「こっちはこっちでうまくやるから、」

お願いできないか？」

「…確かに…人間一度は外へ飛び出さなければ
なりませんな、本人がいいといってくれば、引き受けましょう」

「ありがとう、私は戦争が終わったら混乱した…国は
ムリだがサウスゴータをまとめてみせる、もちろん悪事は働か
ない」

「がんばりなさいよ、フーケ」

「ふふ、その名はやめてくれ、マチルダがいい」

「そうね、マチルダ、がんばりなさい」

「あんたたちこそ仲よさそうね、がんばりなさいよ」

「うっ！…！」

ルイズは顔を赤く染め

浩二のほうを見た

浩二は顔を動かした

そしてルイズは笑いありがとうとマチルダに言って
その場を去った

一度は敵対した関係だが
どうやら和解してみたいに見える

27 ティファニア（後書き）

ご意見、ご感想などありましたらお気軽にどうぞ

28 ロンメル秘密兵器

…かと思ったらフーケがまた戻ってきた

「今度は？」

「そういえばロンメルさんが貴方達に
みてもらいたいものがあるらしいわ」
「それだけ、じゃあ」

また去った

「見てもらいたいもの？」

…というわけで翌日
ロンメルの下を訪れた

「おお、よくきてくれた、義勇軍戦車連隊長」

軍人らしく

きびつとしている

「昨日マチルダからきいたと思う、ちょっときてくれ」

浩二とルイズはロンメルに
連れられどこか古めかしい家へ連れてかれた
なんでもここが自宅らしい

「この中だ」

自宅の中にある格納庫

この中になにかあるのだろうか？

ガララ…

扉をあければ…

そこには戦車らしきものがあつた

「こ…これは？」

「2号戦車D型、火焰放射タイプだ」

その名の通り

弾のかわりに炎を噴く戦車である

対人戦闘に対してもものすごく有効であろう
精神的ダメージも与えられる

「この戦車を…どうするので？」

「…使わないか？」

「？」

ルイズは話についていけない
だが二人の話は進んでいった

「こいつは実戦でも役立つ

私をもつていても使い道はない」

兵員不足になるが…
地球製の兵器となれば押収しないわけにもいかない
浩二は答えた

「いいでしょう、大切にお使いさせていただきます」

…こうして新たに火焰放射型の2号戦車D型を入手した
これは弾の補充などは機関銃以外にいらないので
運用も楽である

その後、数度サウスゴータ守備隊の残党との
戦闘に用いられ戦果を挙げた
能力が評価されいよいよ決戦、この戦いにも使われる事になった

28 ロンメルの秘密兵器（後書き）

ご意見、ご感想などありましたらお気軽にご返信

29 最終決戦

…いよいよ決戦の時だ

2号戦車の威力を知る
歩兵に対しものすごい威力を出した

その後、ジューコフ元帥より
部隊へ連絡が入った

「更に進軍し王宮を制圧しろとの事だ、皆行くぞ
この分では明日には戦争が終わる」

連合軍は村より進軍を始めた

貴族議会

「議長！いいかげんにしてください！
もう敵は目前に迫っているのです！」

「まあ、まちなさい、今増援がくる所ですよ」

「しかし！一番近い部隊でもここまでくるのに
2日かかります！敵の進軍スピードから計算すれば
明日にもここにきます！」

「心配はいらない、ここにだって8000の精鋭がいるではないか

「？」

「質では敵に勝ると思うのだがね？」

「2日はおるか一週間は持ちこたえるでしょう」

「もう！私は知りません！」

そういつて、参謀は部屋を出ていった

クロムウエルの無能が敗北を招くと書いた紙を残し
どこかへ亡命したのだろう

翌日、あまりの無能さに
あきれて参謀が亡命した翌日である

いよいよ連合軍はロンディニウムまでたどり着いた

「……ん！発見した！敵の司令部だ！」

しかし火焰放射型では建物を燃すことはできても
破壊することはできない、その為後方の中戦車隊に
仕事を命令した

「目標は距離50の敵司令部！」

地図で確認しつつ

選んだので確実だろう

実際そこはアルビオン軍の総司令部である

町の中に造った時点でクロムウエルは無能と言えよう

「撃ち方始め！」

ドゥーン！

建物からは弾の命中と共に
すごい音と煙が

完全破壊すべく戦車連隊（火焰戦車以外）は
一斉に敵司令部を叩いた

その途中、アルビオン軍580ほどの集団が
トリステイン軍を襲った

ルイズは慎重に虚無の魔法の呪文を唱え

ゴオオー！！

発動、580名は一気にふき飛んだ

議会

「もはや、我が軍に勝ち目はありません、
敵は三方向よりロンディニウムを包囲、圧倒的な戦力で次々と
陣地を突破してゆきます」

「閣下、ここは王都を無防備都市宣言し
一度捨ててほかの部隊と合流することを進めます」
「そうすれば、反撃は可能です」

「いや…増援部隊が来るまで王都ロンディニウムを死守せよ！」

死守せよと宣言したは

いいがこの日の午後3時ぐらいになると王宮のすぐ近くまで
連合軍は迫った

「本当に！！本当にやられてしまいました！！！」

「まだ西ルートがあいています！今のうちに撤退すれば

ギリギリ間に合います！閣下！お願いします！無防備都市宣言を

！！

国民を巻き込むわけには！」

「…破壊しろ」

「…えっ？」

「貴族の情けといえよう…戦争に勝てないのでは

平民以下である、したがって我がアルビオン民族は生きる

資格がない、すべてを破壊しろ…」

クロムウエルは焦土化作戦を発令した

その内容は

1：すべての軍事基地、兵器、町工場、店、とにかく物という
物を壊すこと

2：国民を全員殺す事、殺した後自らも自決すること

そうする事によって栄えあるアルビオン民族のすさまじい歴史が
後世に残り

再び貴族派による大国家が生まれる

3：この作戦の責任者は指揮官にある

4：これら命令は、すべての部隊長に早急に告知され、この妨げとなる命令は無効となる

まるで、ヒトラーの『ネロ指令』のような命令だ、こんな事軍部が出来るはずがない

一方義勇軍は王宮への突入に成功した

ハヴィランド宮殿 -

「敵の砲火はなし！竜騎士の迎撃もなし！」

「よし！ここからが歩兵の本領だ！突撃！」

橘中佐の掛け声と共に

歩兵連隊は宮殿入り込む

アルビオン軍は宮殿内では弓や魔法を使うわけにはいかないだろう
宮殿を破壊するような事があればクロムウェルからお叱りを食らう
かも

しれないからである

一方航空隊は -

護衛の戦闘機と零式輸送機（爆弾搭載）を

向かわせた、彼らの任務は

宮殿内にある兵舎の破壊である

輸送機 -

「...」

「投下！」

「よし！投下しろ！」

輸送機は爆撃専門ではないし

爆撃機でさえ目標から外れる、数発は外れた

しかし一発、兵舎に命中、大きな建物だが木造で
アルビオン軍の兵舎は燃え上がった

「よし！」

「目標ヲ撃破セリ！」

一方浩二は反抗してくる敵の駆逐に当たっていた

ゴオオ…

「ぎゃあああ！！！！」

「シエスタ！あっちからも敵が！」

「はい！」

苦労はしたが

指揮系統が崩れた敵軍など恐ろしくもない
次々と撃退していった

一方クロムウエル地下室にこもっていた

地下室 -

「どうだ？町は破壊できたか？」

「はい！だいぶ！」

…しかし兵士は嘘をついた

自分の国を壊すような行為はできない

殺害対象には家族もいる

こんな命令引き受けていられない

アルビオンの軍人達や大臣たちは

どうやってトリステインに降伏するか考えていた

「あと、この地下も要塞化しろ、残りの兵士を後退させ

要塞になったここで打ち返せ」

「…わかりました…」

ガチャッ

その時扉が開いた

「失礼します」

フードを深く被った女性が議長地下壕へやってきた

ガリアから送られたシェフィールドである

そう、ガリアはアルビオンの味方をしていた

本来アルビオンに30万も正規軍はいない、15万ほどはガリア軍であった

これは後の調査で判明することである

「これで…レコン・キスタも終わりだな」

私はガリアの者なのでさっさと本国に戻ろうと思います」

「しかし…」

「貴方も一緒に亡命したいっていうのならいいだろう

だが一国の主としてそれは許しがたい行為だとはわかっているはずだ」

「いずれ世界は貴族の物になる、私に任せろ」

「そのうちレコン・キスタの仇でもとってやる」

そういつてシエフィールドは素早く地下壕を去った

彼女はガリアへ帰還し、ジョゼフ王にこれまでの事を

報告する必要がある、その為にも帰国しなければならないし
生き残らなければならない

一方、木之本を連れて行動中の中井曹長は

「…敵は粗方、片付いたようだな」

「木之本、お前はあっちをみにいってくれ」

「はい！」

木之本と二手にわかれクロムウエルの居場所をさぐった

「奴はどこに潜んでいるのだ…？」

その時！

ドン

「いてっ！」

「いてて…」

中井はシェフィールドと
遭遇した

「何者だ貴様！」

「チッ！」

シェフィールドは逃走を開始
中井は追う

「待て！！貴様！！！」

ガシッ！

シェフィールドを捕らえた

「貴様！クロムウエルがどこに潜んでいるか知らないか？」

「…ふん、どうせこの国は滅びる、いいだろう」

戦うより教えたほうが

利口だと判断した

彼女はどうしても本国へ帰国せねばならないのだ

「…ここを右にいった所にフタっばいがある
その地下壕に奴はいる」
「あとは勝手にしろ！」

タタタッ

彼女はかけていった
中井は見逃してしまふ

彼女はガリアより送られた人間だということにきずかず
あまり偉い服装もしていない為にどこかへ敗走する
兵士にしかみえなかつたという
捕虜にすればいいのだが生憎スペースもない
ほつといてもさほど脅威にはならないと判断したのだ

それはそうとクロムウエルの居場所を知つた中井は
30分以内に歩兵連隊全員にその事を伝える

そして…

「ここか…」

「突撃い！」

フタをあけ次々と入り込む
兵力の増強もまだだつた為地下壕を警備する
アルビオン兵もいない、義勇軍にとって大チャンスだ

「行けえ！」

ガチャッ

「!!!」

「見つけたぞクロムウエル!! 貴様を捕縛する!」

「くっ!」

クロムウエルは魔法をかけ
自分の僕にしようとした

しかしそこを村井が射撃
足をあつ動けなくした

「う…あああ…」

「さあ、行くぞ」

午後5時、クロムウエルは戦闘停止命令を
書いた手紙を各部隊に渡すように近衛兵に指示した

実質ここでアルビオン戦役は終結したが正式な終結は
この3日後になる

29 最終決戦（後書き）

ご意見、ご感想などありましたらお気軽にどうぞ

30 終戦

29

夜 -

「明日からよろしくお願いします！」

ティファニアは予定通り

トリスティンに行く事になり挨拶をした

「それでは、そちらもうまくやるんだぞ」

「ロンメル元帥こそ、お元気で」

ロンメルは敬礼をした

浩二も敬礼した

2日後、全部隊に停戦命令が届き

無条件降伏、翌日、クロムウェルは負傷している為

外務大臣が降伏調印を行う為にトリスティンへ向かった

「はぁ…こんな錆びれた所に式場があるのですか」

「海軍の戦艦の甲板で降伏調印を行ってもらう予定です」

「…」

アルビオンの外務大臣は声がでなかった
こここの所口々に休んでいなかったせいか

かなりやつれている

この式にはド・ポワチエが参加予定であったが式を前に死体で見つかり

かわりにウィンプフェンが参加、義勇軍からは山下とジューコフ、伊藤や有賀、森下ほか大和乗組員の皆さん

反乱軍からはロンメル、アルビオンからは外務大臣が参加した

式は大和甲板で行われる事になる

「いやあ、我々海軍もすこしは役にたてたんでしょうか？」

「さあ、微妙ですね」

「なあに、きつとそのうち、我が海軍が活躍する時がきますよ」

森下参謀長はすこし笑いながらそう予告した

式を観覧する為山口多聞大佐も大和に乗艦した

「やれやれ…これで戦ってないのにやたら金使ってるなんて言われたらいやですね」

「船は手入れだけでも大変なのに」

「では…」

アルビオン外務大臣は

しょんぼりした顔で

渋々、署名し

トリスティン・義勇・反乱の連合軍に降伏した

調印式終了時 -

「アルビオン！我が軍降伏二降伏セリ！」

ドゥーン！

その時大和の46センチ砲と

伊勢の35.6センチ砲から轟音が響く

もちろん空砲だがそれでもかなりの迫力だ

この光景をトリスティン中の人が見るために

7万人の国民がダングルテールの軍港に集結し

その勢いを目にした

そして義勇軍楽隊（音楽隊より昇進）による

軍艦行進曲の演奏が始まった

なおこの式典はアンリエッタ女王も観覧していた

銃士隊の護衛をつけて

「ここまで、派手にやられたらもう

レコン・キスタの残党は戦意を失うだろう」

「そうですね」

さらに、国民から歓声がかきこえる

「トリスティン万歳！アンリエッタ女王万歳！大日本義勇軍万歳！」
行進曲の終わりと同時に
再び2隻の戦艦は空砲を放つ
特に大和の音はすごい、伊達に46センチ砲はつけてない
さらにその後航空隊と大和の水上機による
編隊が国民の上空を飛ぶ

この日は国民勝利の日として祝日になった

そしてアルビオン戦役は多くの犠牲を払いながら終わった

戦闘の結果はいつまでもない
連合軍の勝利だ

この戦いにより
アルビオンから巨額の賠償金を得た
そしてアルビオン大陸全土を占領した

この2日後、御前会議が行われた

国家第一会議室

議題は『アルビオンの処理について』だ

「アンリエッタ女王、どうされます？」

「…とりあえず、私は植民地というものを
もつつもりはありません」

「そんなことは国民も望んでいないことは十分理解しているつもり
です」

「まず、形だけは独立させないと…ですね」

「しかし代わりの王にふさわしい人間がいませんね…」

たしかに、貴族という貴族はレコン・キスタを支持した
適当に選んでは敵勢力になる

しかもクロムウェルより優れた人材ならそれは大変なことである

そこへ1人の提案者が

「はい、確か反乱を起こした奴に

ロンメルという男がおらんかったか？」

「彼は指揮官としてとても優れた人間

らしい、彼を代王にしてその間我々が総力をあげて

ブリミルの血を引く者を探し、その人による王権を復活させると
いうのは？」

しかしロンメルは異世界からきたこと

平民扱いだったこともあり反対の意見が多かった

しかし彼の判断能力がハルケギニアのほかの者よりも
優れているのは事実であり最終的に多数決で

この案は検討される事になった

続いては、ルイズを代王にするなどの話だ

これについてはあっさり可決

また今回義勇軍の前線部隊を指揮し最も戦いで

活躍したという浩二にラ・ロシエールの領主に
なる資格を与えるという案もアンリエッタの口からでた

これは賛否両論であったものの可決された

30 終戦（後書き）

ご意見、ご感想などありましたらお気軽にどうぞ

31 進むべき道

翌日 -

ルイズと浩二を始め義勇軍軍人は多くが呼び出された

「私を公爵にするですと？」

「はい、ジューコフ元帥もです」

「な…なんですと？」

「山下総帥は軍の総司令官として活躍した功、
ジューコフ元帥も軍隊を指揮した功です」

アンリエッタから

信じられない言葉が次々とでる

「あと、ルイズには代王を

中川さんには男爵という地位を」

「…はい？」

「男爵よ！アンタ男爵なのよ！」

バロン西こと西大佐（男爵）の名前が
こっそり頭の中にでてきた

「中川さんにはダンゲルテールを」

「ええ！？すごいじゃないの浩二！
土地もらったのよー！！」

「な…なんですって！？」

「はい、ラ・ロシエールを所領に」

「…ということは？」

「あの町は好きにしていますよ」

トリストインも捨てていた

財政難の町、ラ・ロシエールを山下が統治することになった

「もちろん援助金は出します、がんばって

あの街を立ち直らせてください」

「は…はあ…」

こうして、大体の人は

貴族になったり爵位をえたりした

これをうけ、義勇軍はダングルテールにも
陸軍の基地をつくる事にした

夜、軍令部・

「しかし微妙ですな」

「戦車連隊を全部送ったところで兵力が足りなくなります…」

「うむ…さらなる軍拡が必要なのでしょうかね…」

「とりあえず滑走路はちよつと整備すれば造れそうですね
航空隊の戦力を半分あちらに送るといのは？」

「一機で竜30匹以上と戦える事はだいたいの予想でわかっている
そうですね、ただ将来は各兵科に一個でいいので師団を持ちたい
ところですね」

「予算と相談し、慎重に計画を進めるべきですね」

「はい」

分散したら兵力不足に
なってしまうほどギリギリな義勇軍

その為さらなる軍拡が必要と

軍の上層部は決定、現在コルベールと

ジューコフが連れてきた技術者達、そして彼らが教育した整備工場
があるが

それを生産工場に格上げし兵器の量産や新兵器の開発を行う必要が
あると山下は熱弁した

しかしそれを実行するのはとても難しい

まず設計できる人がいない

続いて技術はあってもいちいち手作業でやらなければいけないので
大変な時間と労力が必要であり給料をあげなければ
従業員は反乱を起こしストライキするかもしれない

そして、生産スピードも遅い
この計画は実行可能かすら疑われた

しかし一週間後、この話を聞いた浩二は
計画の実行を要請した

やはり戦車7両のみでは広いダングルテールの
警備には不十分なのである

實力はあっても即座に展開する事は難しい
かといって虚無を使えるルイズだって虚無が成功するかすら保障が
ない

海軍の艦砲射撃は基地ごとぶっ壊しそうで不安だ

しかし計画は進みつつあった

オスマンの好意で学院の人たちが協力してくれて簡易な木造だが
兵舎を造ってくれた、さらに戦車の格納庫までおまけでつくってく
れたという

滑走路の完成はさらに一週間後になるというが
これも、手伝ってくれたのである

しかし、一番進展したのはこんなことでもない
ルイズと浩二の関係だ

二人は結婚したいと思っていた
ヴァリエール公爵も負けて実力を認めたのか浩二ならルイズを任せ
られると

発言、アンリエッタも賛成した、反対する人もいたがあくまで軍人
として生きたいという

彼の意見も聞き彼は王族にはしないということ、これが一番大きかった

これだけで二人の結婚を許可する大臣たちは多かった

多数決の結果これだけで二人の結婚が認められるが

ルイズの希望により城でこっそり行われる事になった

式場 -

「ルイズ…」

「浩二…」

「中川さん…おめでとございます…」

「畜生…あいつだけ出世して…すげえ奴だ…」

こうして二人は結ばれた

トリステインに平和が訪れた…

…と思っていたのか？

敵対勢力になりつつあるガリアを倒さない限り、物語が終わる事はできぬ！

(ブリー風味)

とらひわけだ…続く…

31 進むべき道（後書き）

ご意見、ご感想などありましたらお気軽にどうぞ

さてさて続編では、最後にいったように

ガリアとかが敵対勢力になったりします。

また、ワケありで地球へいつたりしましてその途中

ようやく元々の主人公である才人や影響元の

某老人も登場予定です。

今回あまり活躍の場がなかった海軍ですが

次章で活躍しますので「なんだ艦隊物じゃないのか」とがっかりされた方もご安心ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5186h/>

続・八号の異世界

2010年10月9日02時07分発行